発刊のことば

人類の進歩と調和をテーマにした万国博が催された今年、私たちは、かって想像もしたこともない〝未来都市〟に対面し、はたして〝文化〟とはなにかと新しい課題に接しました。

その万国博を成功裡に終らせられた石垣泰三氏（東芝会長）が「無事是貴人」という雅印を愛用しておられることを聞くに及び、真の平和こそ最大の文化を生む根源であり、石垣氏が万国博に寄せられた願いが、いまにして胸に響いてくるような気がいたす私です。

本年二月、町民のご協力と関係者のご尽力によって、当町中央公民館で催されました「郷土文化人遺作遺品展」は、過去幾百年間、美しくも平和であった故郷のなかから生れた傑作ばかりでありまして、この尊い文化遺産を、広く、永く伝えてゆきたいと、参観者の多くは感じられたことと思いました。

郷土文化保存のために、没我の境地でお骨折り願っている当町文化財関係の諸氏が、その気持を受けて、遺作遺品展出品物のなかから、日本的に有名な日比野鷗翁、西脇蘭渓氏などの作品をはじめ、詩書、和歌、俳句、絵画、遺稿、遺品など百三十六点を写真におさめ、「養老町文化人遺作集」として出版される運びになりましたことは、磨きあげられた創作者の、それにも劣らぬ「無事是貴人」の快挙と、ただただ敬服いたすばかりです。

養老に生れ育った私たちは、ぜひ一家に一冊は備え、つぎの世代に誇りをもって伝えてゆくことができたらばと願い、重ねて出品者並びに委員諸氏のご労苦に感謝いたす次第です。

昭和四十五年三月

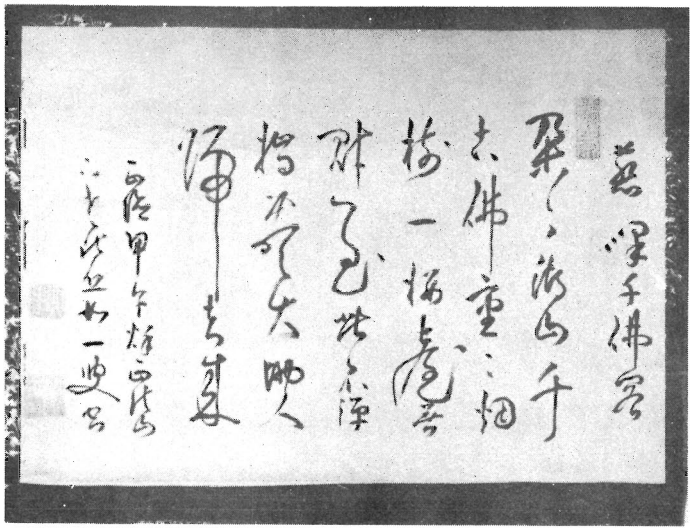
養老町長　浅田契

目次

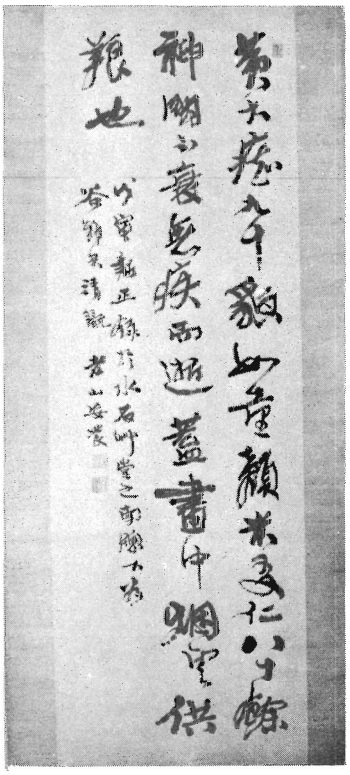
一、詩書 …… 一 …… 49
二、和歌俳句 …… 九 …… 57
三、絵画 …… 一九 …… 64
四、工芸 …… 三六 …… 71
五、遺品遺稿 …… 三九 …… 72

頁

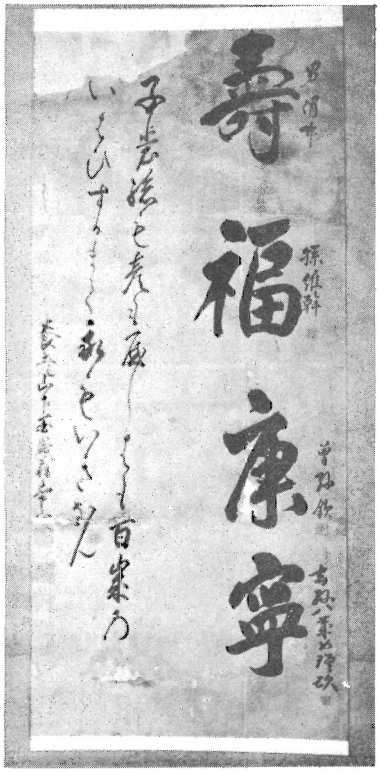
一、大牛和尚　詠詩七絶



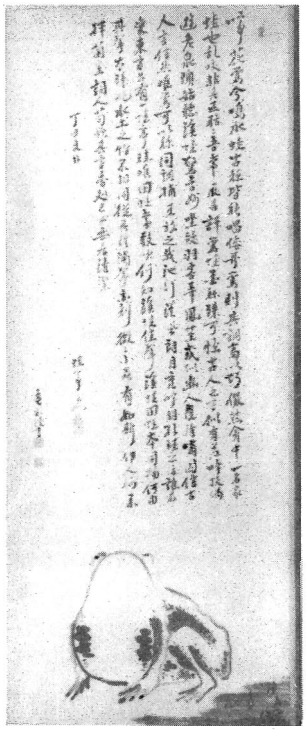
二、安田老山　詩書



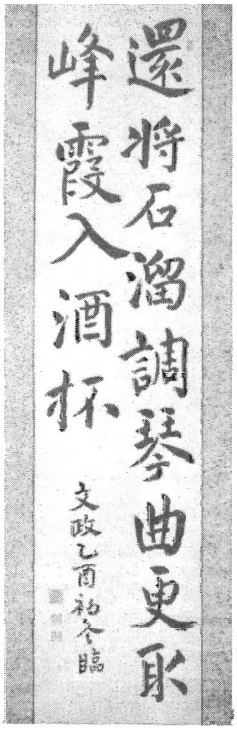
三、井口寿山　和歌



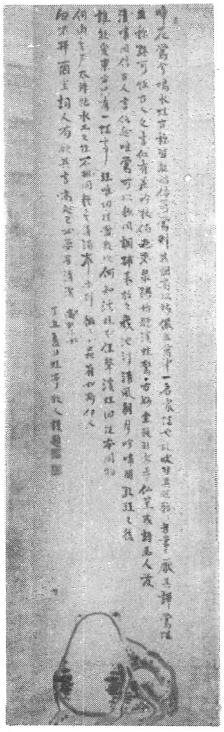
四、柏淵蛙亭　蛙画賛



五、柏淵貫斉　詠詩七絶



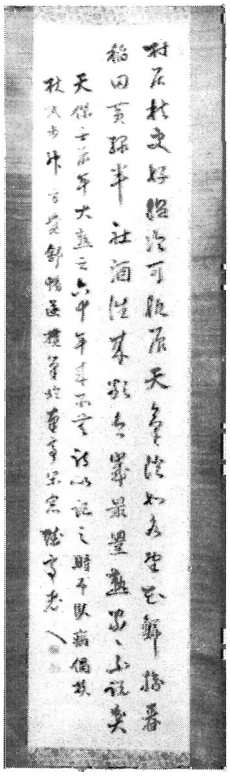
六、柏淵蛙亭　蛙画賛



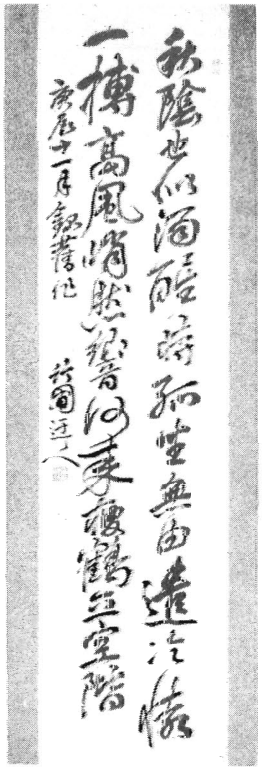
七、井口寿山　和歌



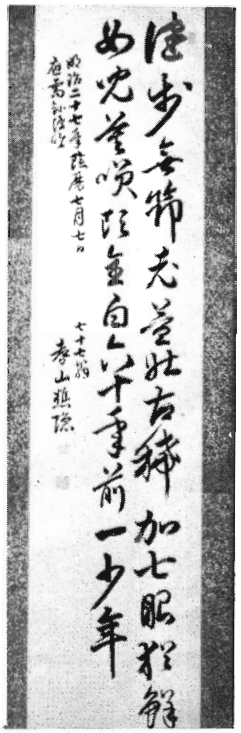
八、柏淵蛙亭　詩書



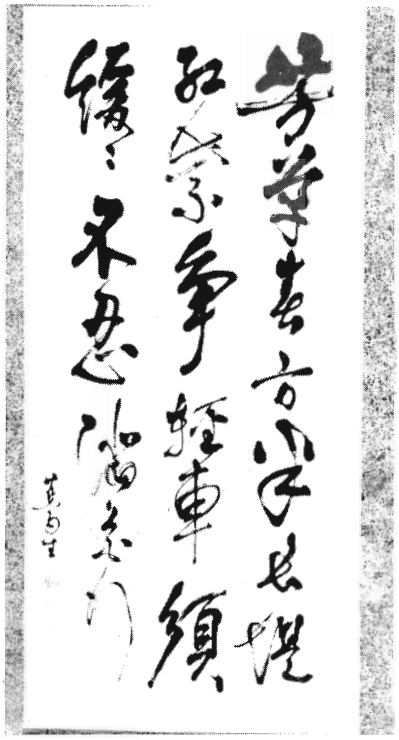
九、戸倉竹圃　詠詩七絶



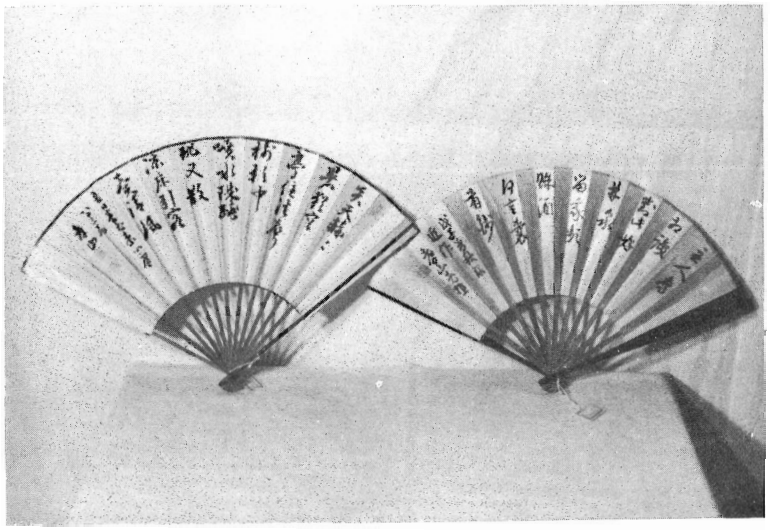
一〇、柏淵耆山　詠詩七絶



一一、富長蕉雨　詠詩五絶



一二、柏淵耆山　詠詩五絶



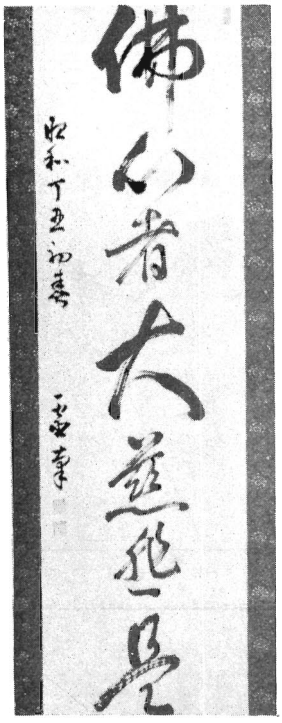
一三、 憩山和尚　一行書



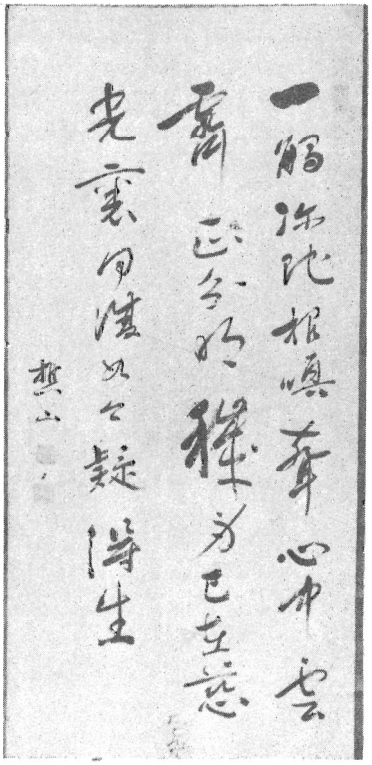
一四、 虎渓和尚　一行書



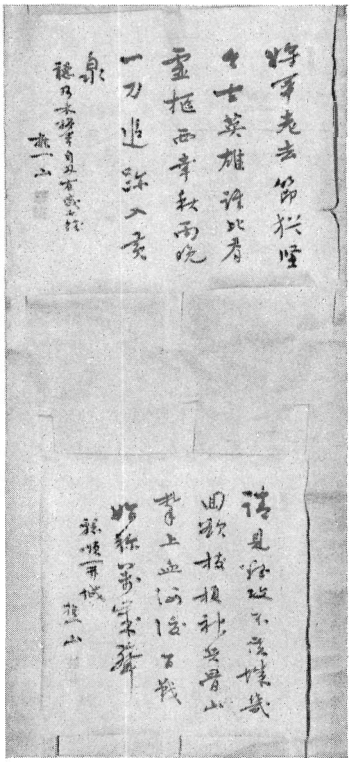
一五、 藤井専随　一行書



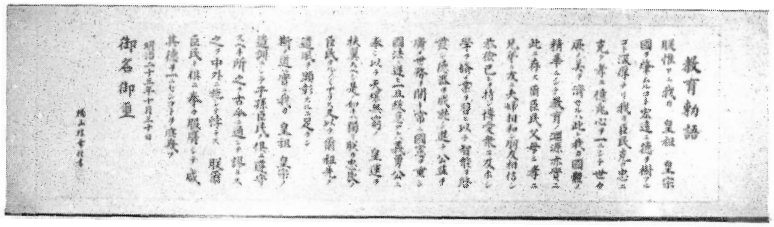
一六、 高木政勝　詠詩七絶



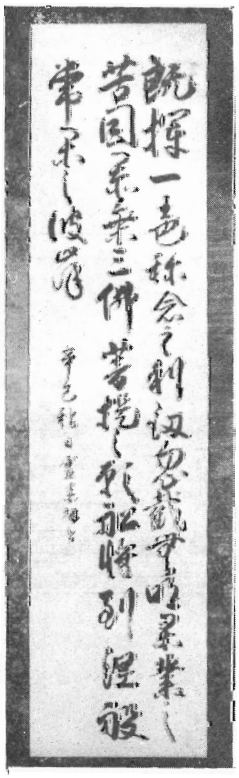
一七、 高木政勝　詠詩七絶



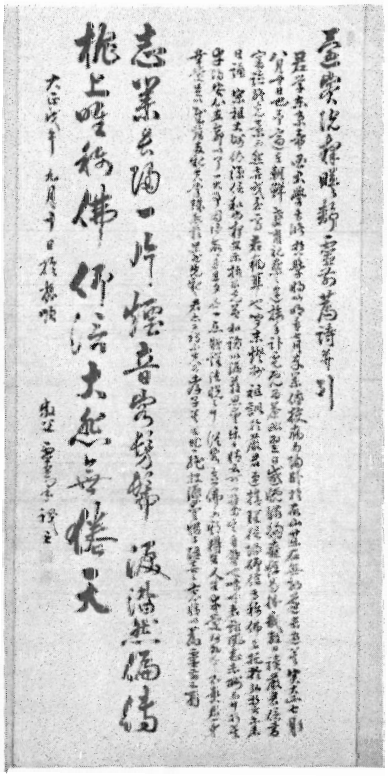
一八、徳山探華　書



一九、日野霊泰　書



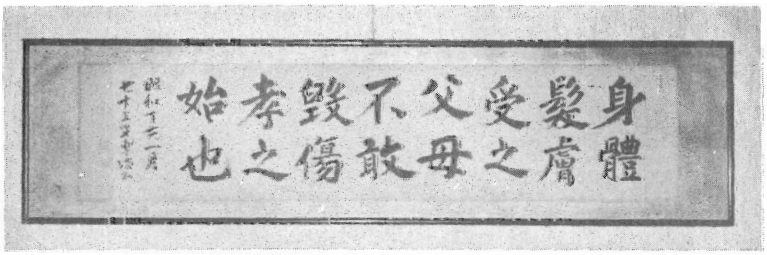
二〇、藤井専随　詩書



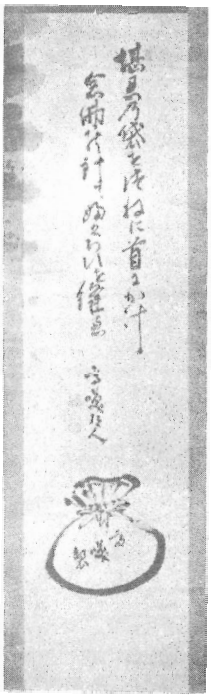
二一、田中鋤雲　詠詩七絶



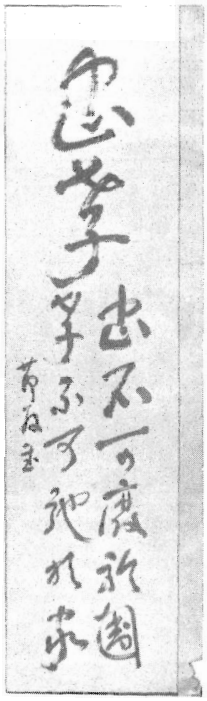
二二、藤井専随　書



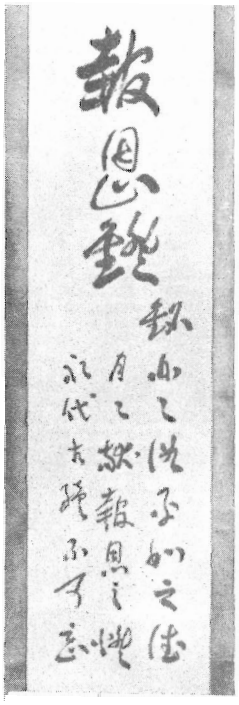
二三、高木秀岳　堪忍袋画賛



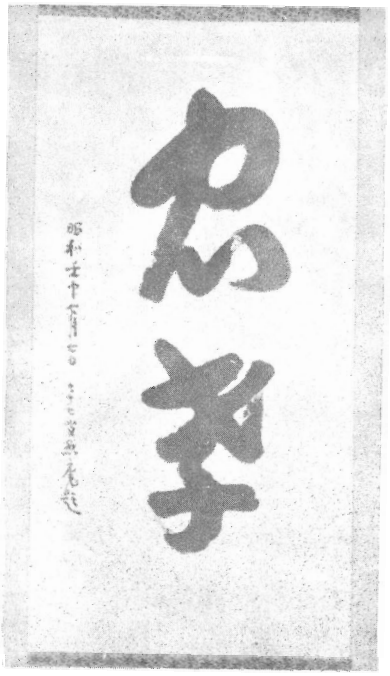
二四、大久保勁節　書



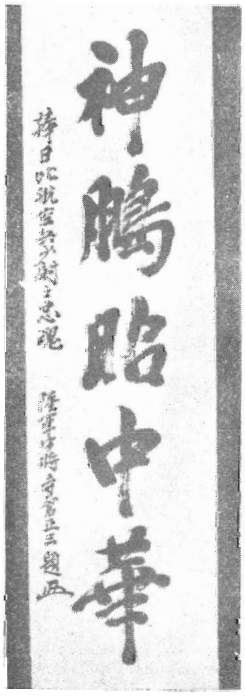
二五、大久保勁節　書



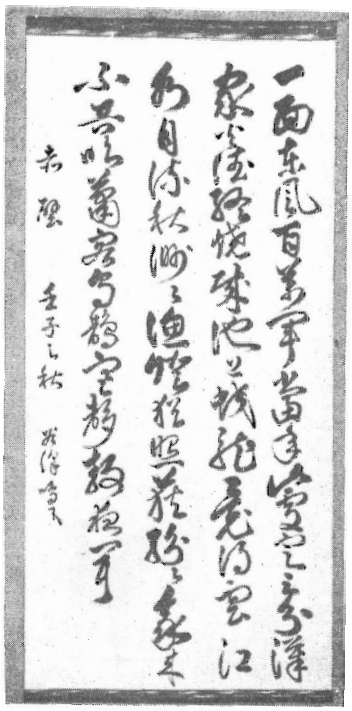
二六、日比文蔵　書



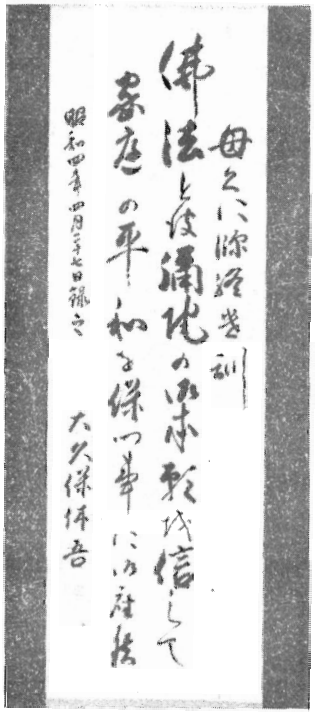
二七、寺倉正三　一行書



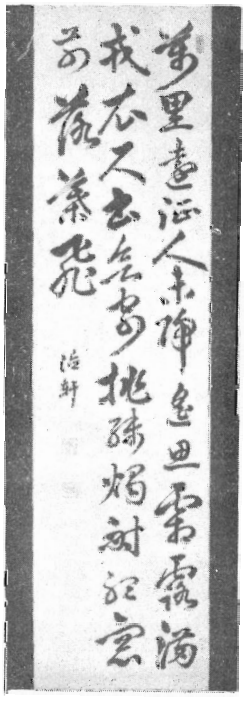
二八、谷沢映静　詩書



二九、大久保休吾　書



三〇、中島徳軒　詠詩七絶

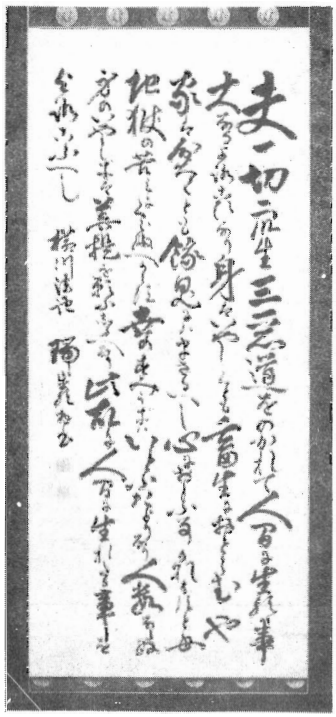


三一、徳山探華　書　百福百寿双幅

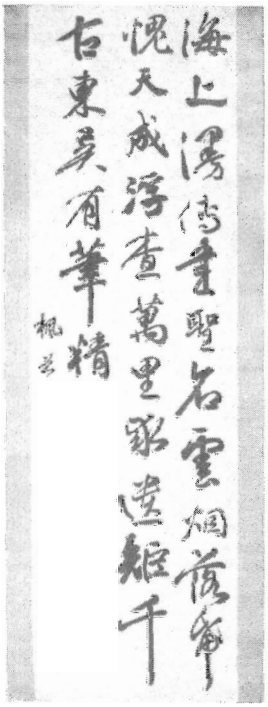




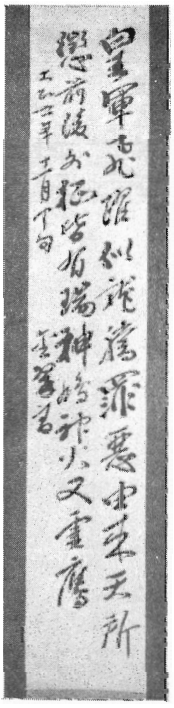
三三、谷沢民静　横川法語



三四、日比楓谷　詠詩七絶



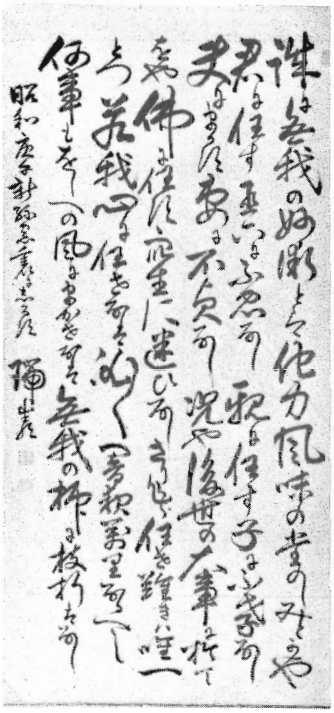
三五、中村金翠　詠詩七絶



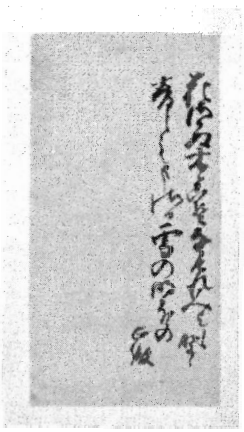
三六、田中景石　書



三三、谷沢民静　書



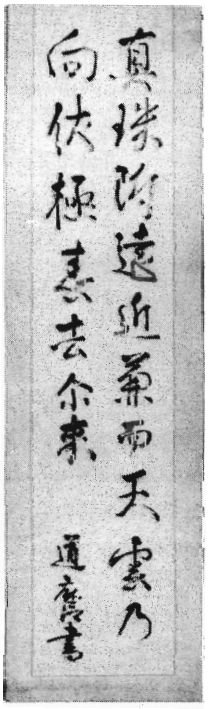
三七、徹書記　書



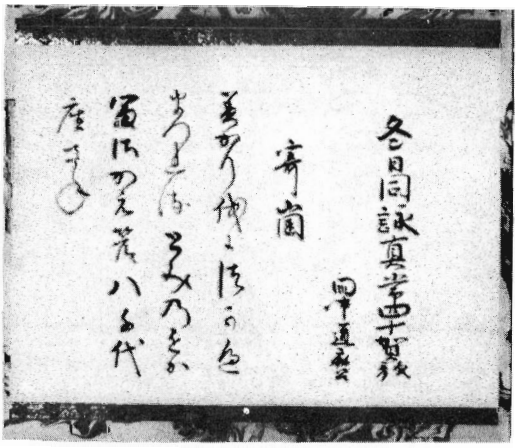
三八、徹書記　和歌



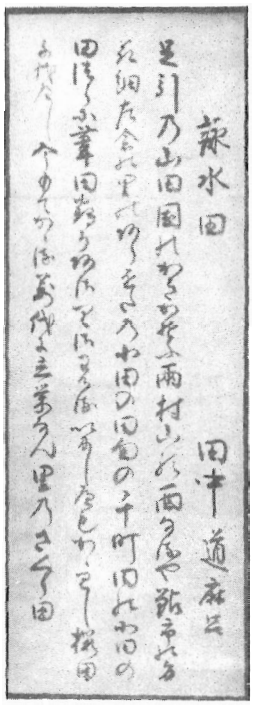
三九、田中道麿　和歌



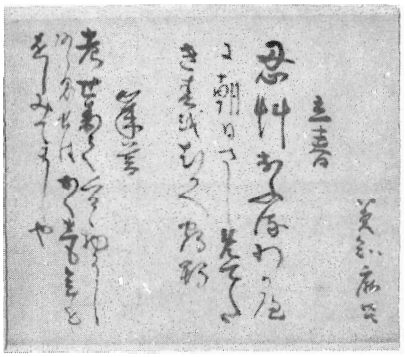
四〇、田中道麿　和歌



四一、田中道麿　歌



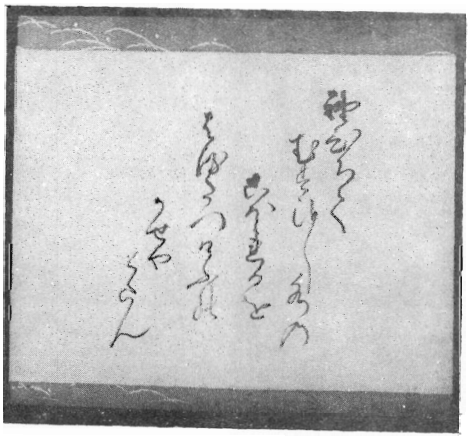
四二、田中道麿　和歌



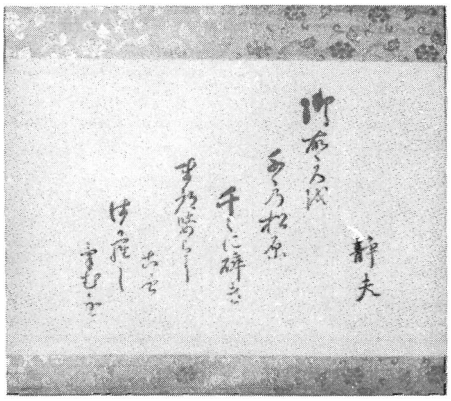
四三、田中道麿　和歌



四四、柏淵石門　和歌



四五、柏淵静夫　和歌



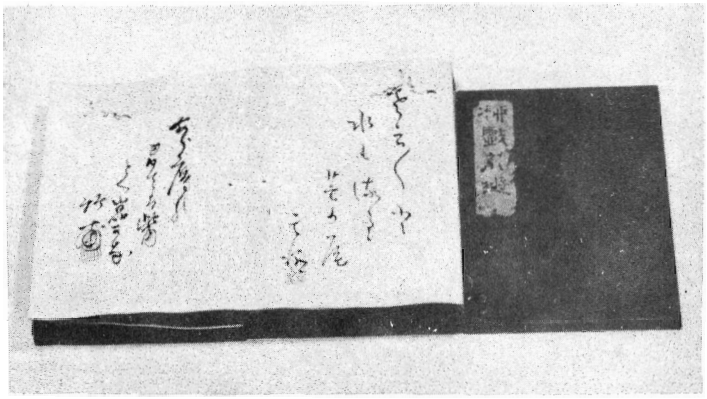
四六、大橋芳樹　和歌



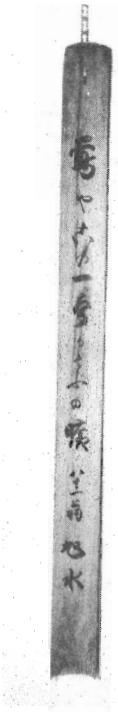
四七、村上其鶴　俳句

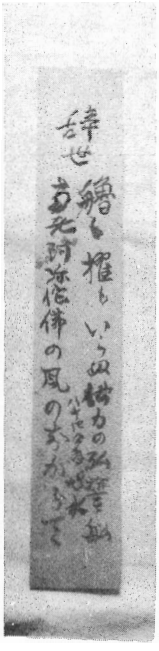


四八、句会寄書

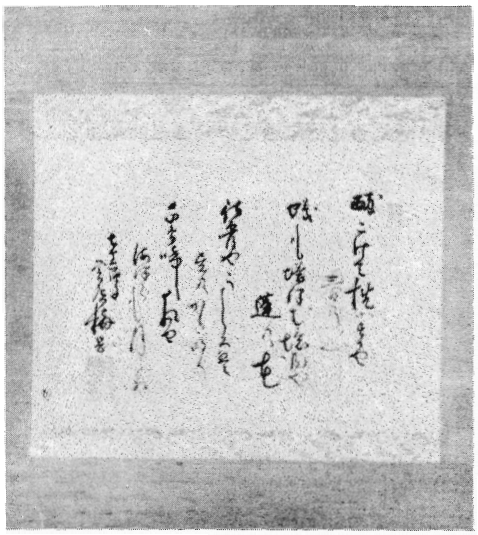


四九、村上旭水　俳句

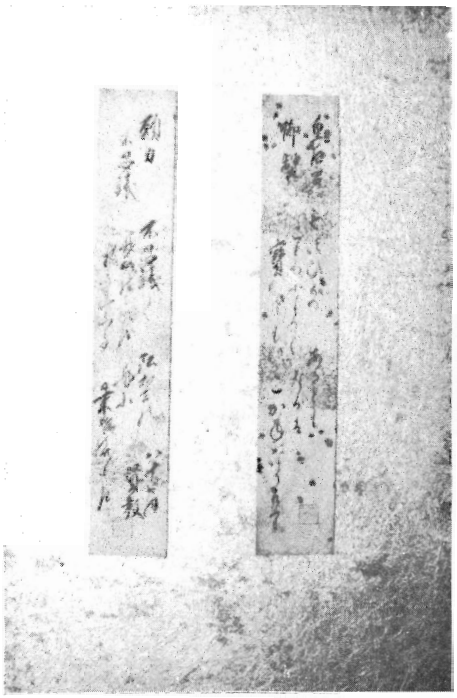




五〇、西脇梅岡　俳句



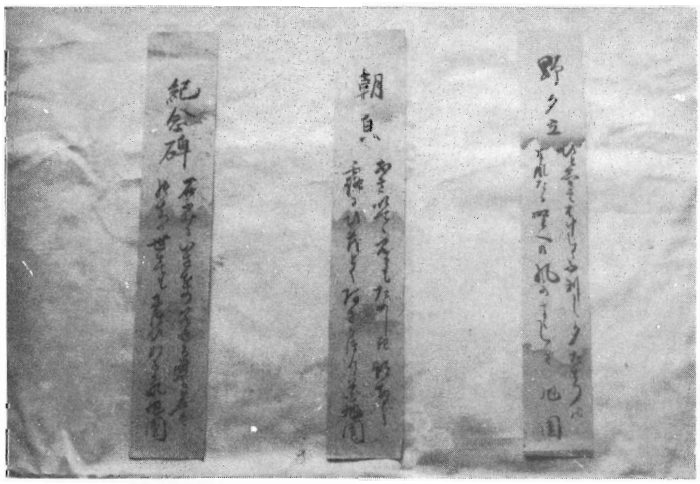
五一、中島賢教　和歌



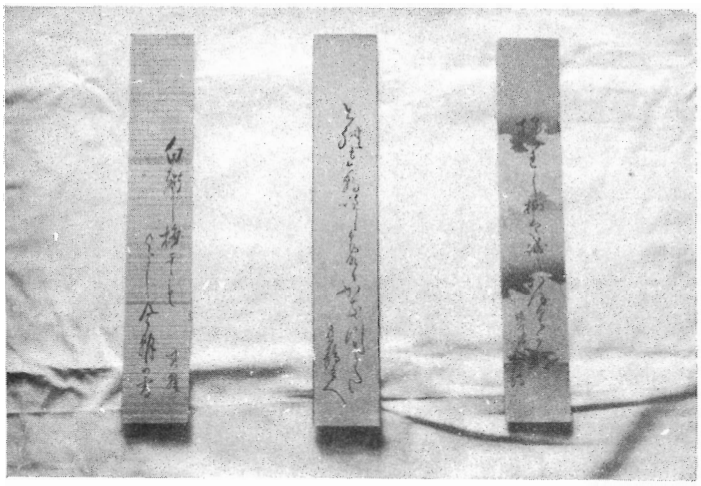
五二、句会寄書



五三、高木旭円　和歌



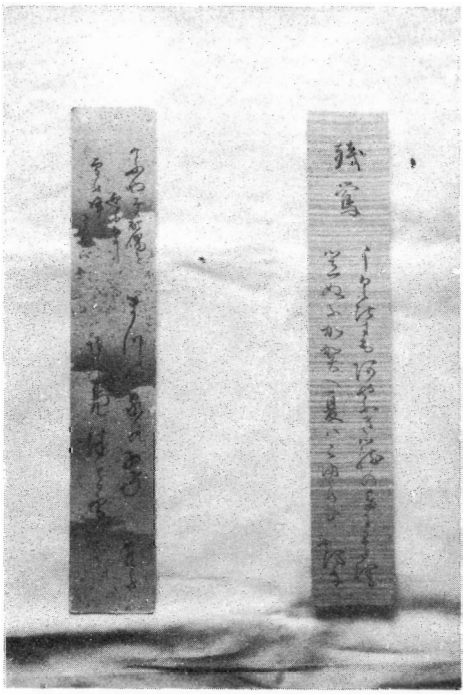
五四　村上其鶴　俳句



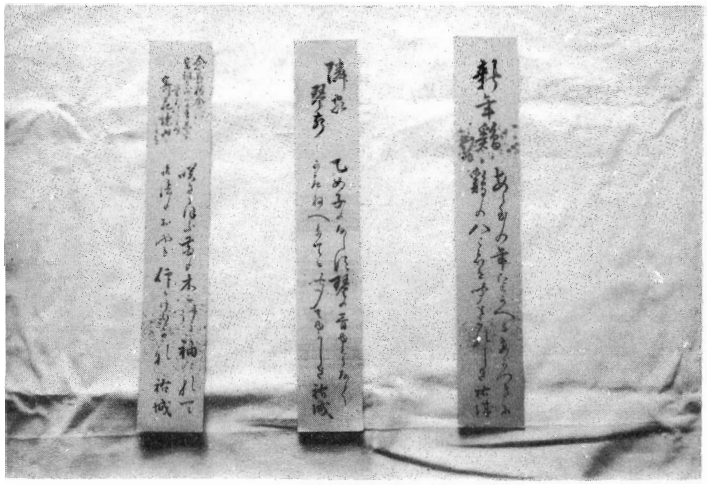
五五　村上月荘　俳句



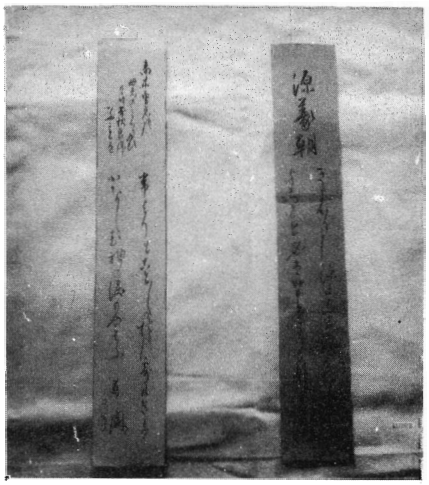
五六　村上鶴子　和歌



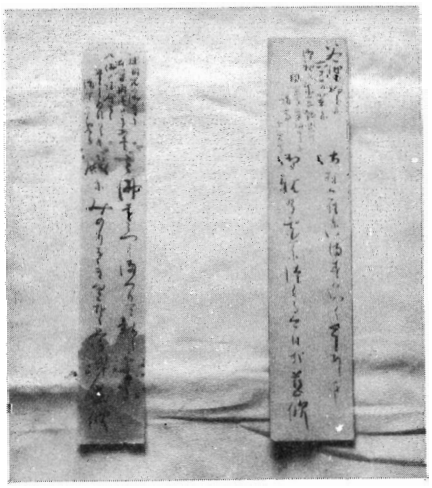
五七、藤田祐城和歌



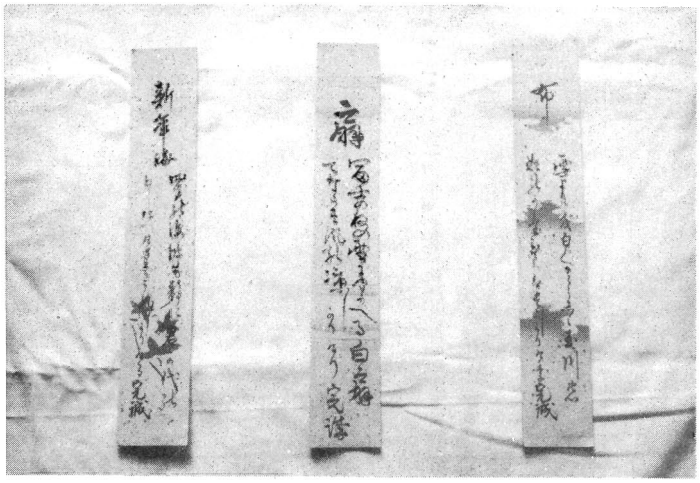
五八、鼻橋慈鳳和歌



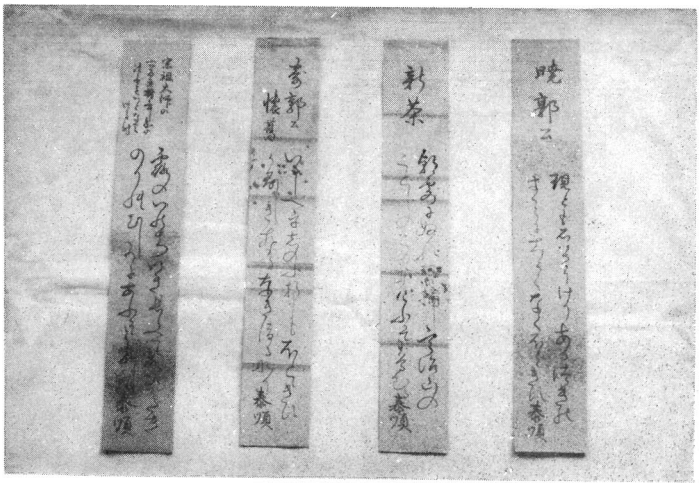
五九、鼻橋慈欣和歌



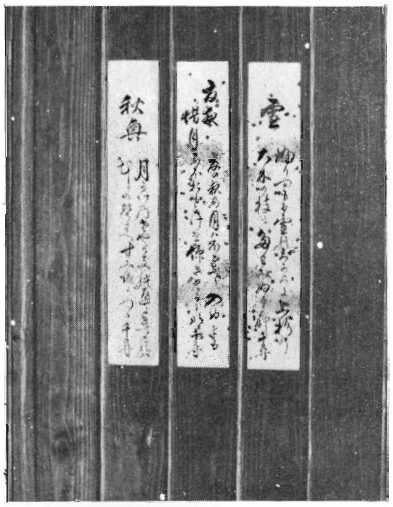
六〇、加納完誠　和歌



六一、日野泰順　和歌



六二　日野泰充　和歌





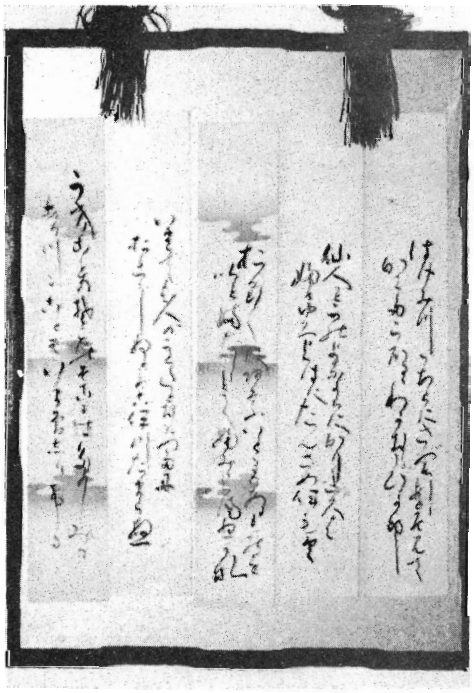
六三　佐竹直太郎　和歌



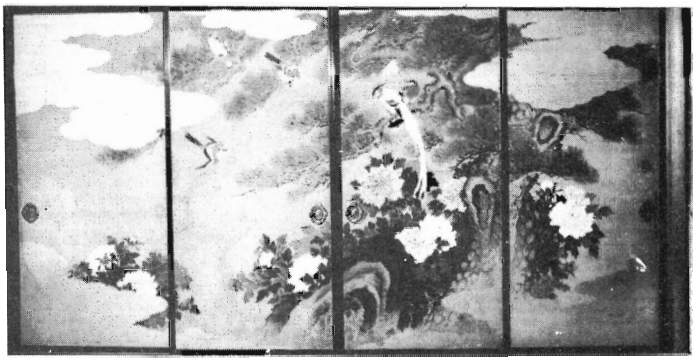
六四、栗田秀畝　俳句



六五、日比三十木　和歌

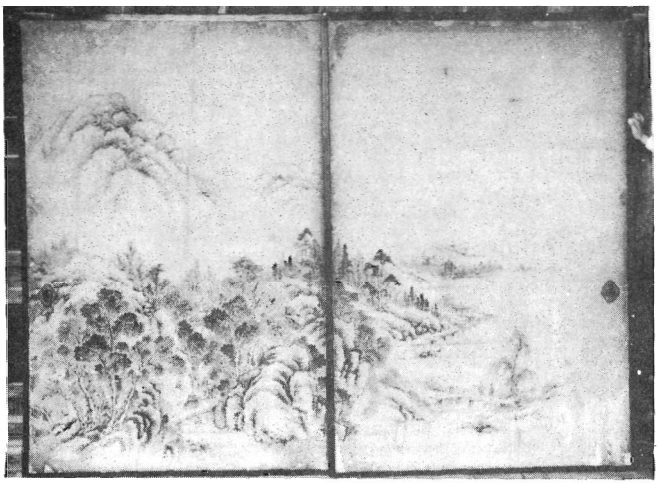


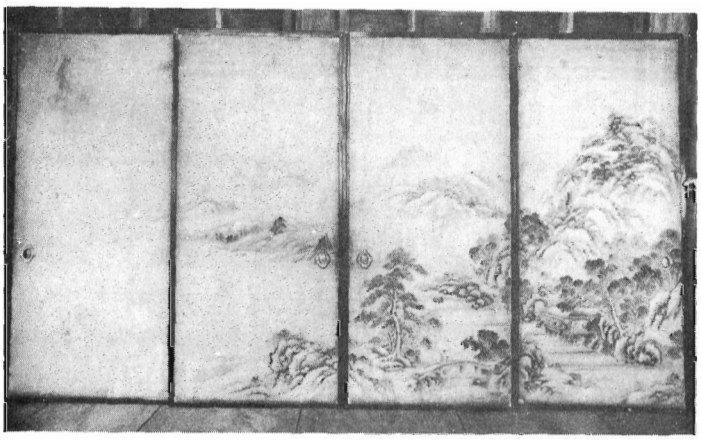
六六　日比野鶴翁　彩色花鳥絵襖



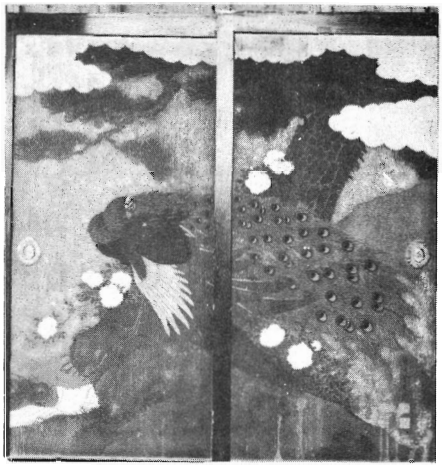


六七　日比野鶴翁　水墨山水図襖





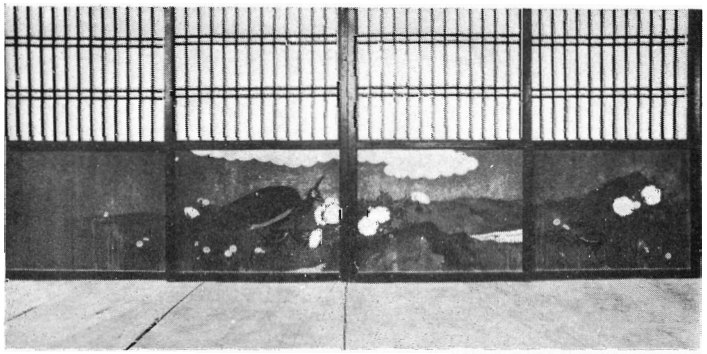
六八、　西脇蘭渓　彩色孔雀図襖



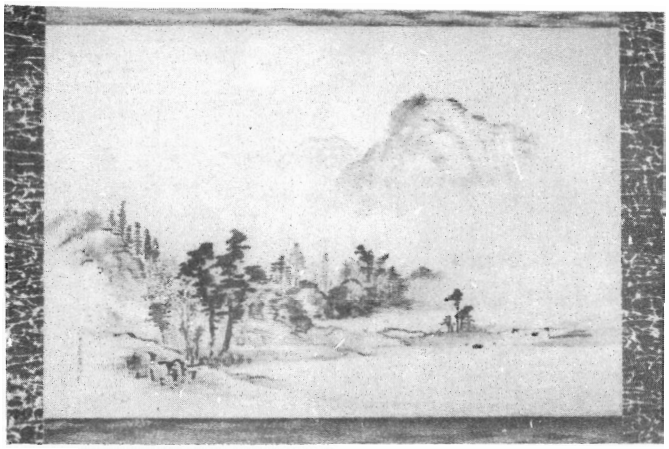
六九、　日比野鶴翁　水墨山水図頼山陽賛



七〇、　西脇蘭渓　彩色孔雀図襖



七一、日比野鶴翁　水墨山水図



七二、日比野鶴翁　遊鯉の図



七三、日比野鶴翁　水墨山水図



七四、日比野鶴翁　仙人の図



七五、日比野鶴翁　養老真景図



七六、日比野鶴翁　白梅の図



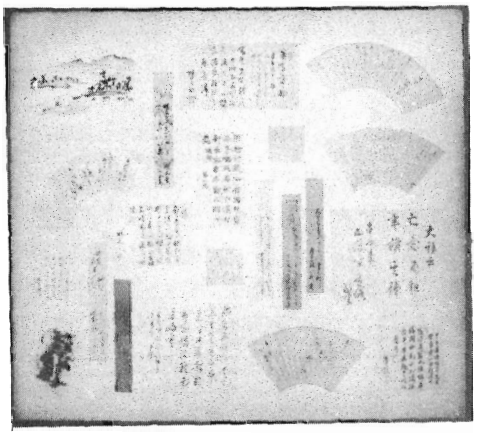
七七、日比野鶴翁　梅花書屋図　梁川星巌賛



七八、日比野鶴翁　梅月の図



七九、郷土文化人遺墨貼交　衝立



八〇、鬼面山谷五郎　錦絵



八一、諸家合作養老真景木版画



八二、西脇蘭渓　瀑布の図



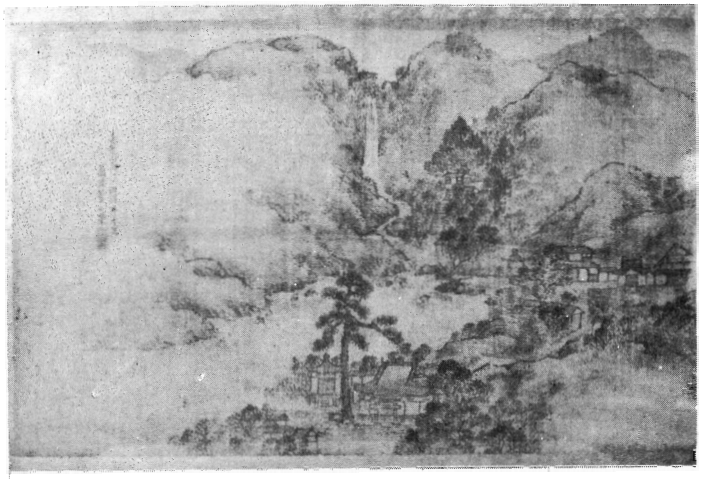
八三、西脇蘭渓　秋景山水図　戸倉耕月庵賛



八四、西脇蘭渓　梅林山水図

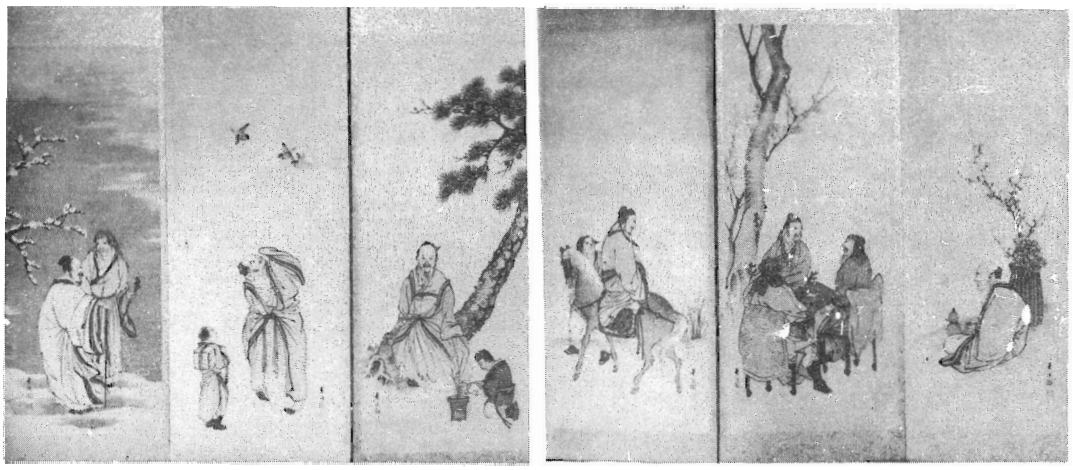


八五、西脇蘭渓　養老真景図

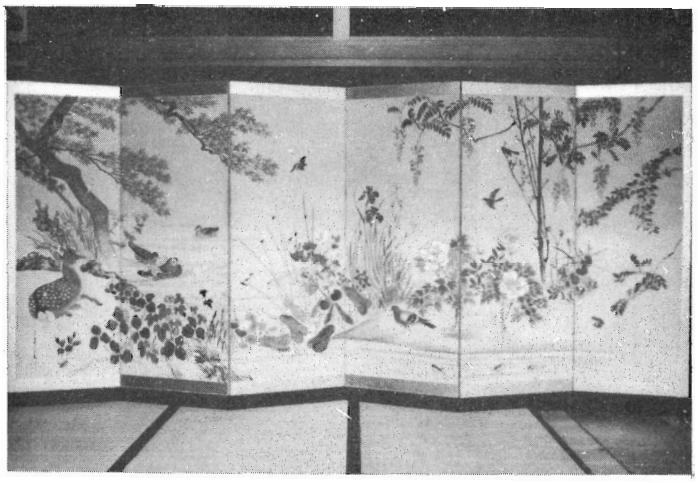


八六　西脇蘭渓　人物画屏風一双

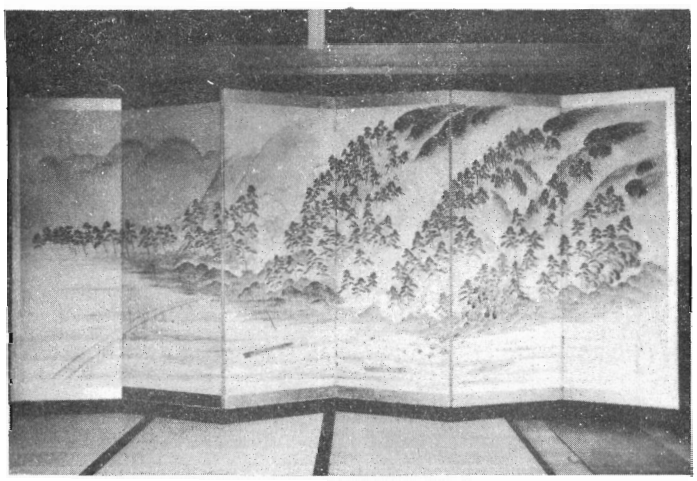




八七、大矢玉文　四季花鳥の図　屏風



八八、大矢玉文　嵐峡の図　屏風



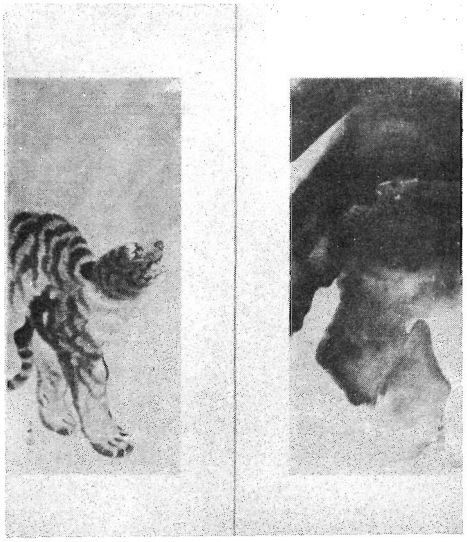
八九、　墨池　雲長顕霊之図



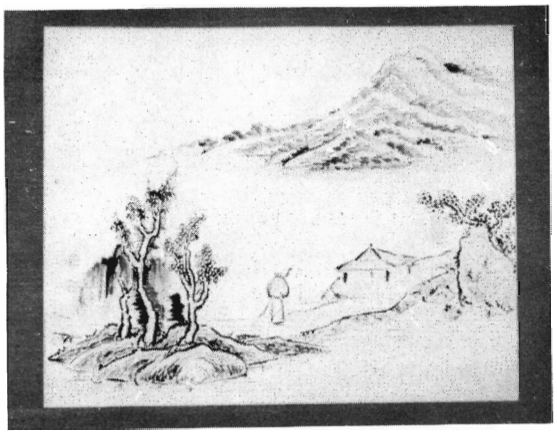
九〇、　丸毛泉石　米法山水之図



九一、　大矢玉秀　竜虎之図　屏風



九二、柏淵貫斉　淡彩人物山水図



九三、児玉芳月　山水之図



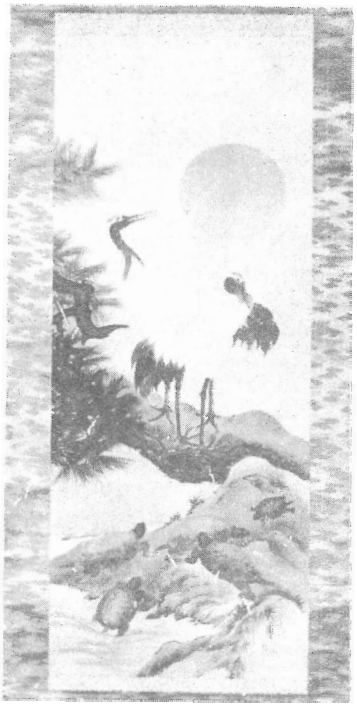
九四、西脇蘭渓　人物の図



九五、富長蕉雨　兎画賛



九六、　児玉芳月　旭松鶴亀之図



九七、　戸倉耕月庵　松上双鶴之図



九八、　徳山探華　出山釈迦画賛



九九、　栄馬麦人　揚柳観音画賛



一〇〇、　伊藤潮音　幽霊之図

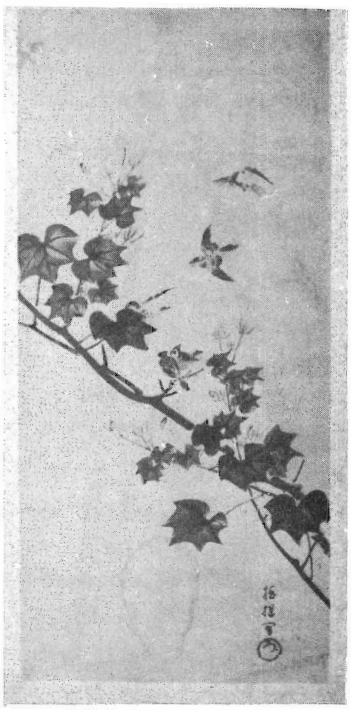


一〇一、徳山探華　弁財天之図

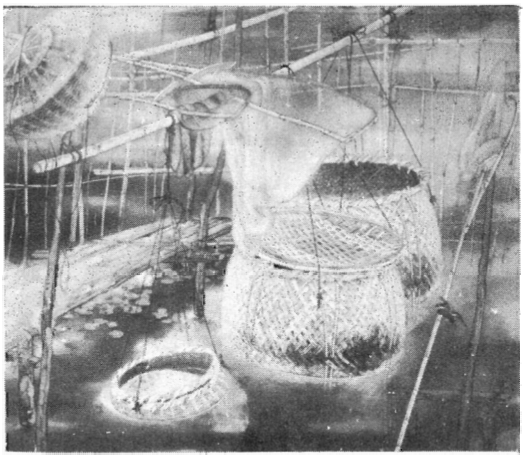


一〇二、鈴木拙操　花鳥之図　屏風





一〇三、土屋輝雄「水辺」



一〇四、土屋輝雄　大黒の図



一〇五、傍島養雲　青緑山水之図

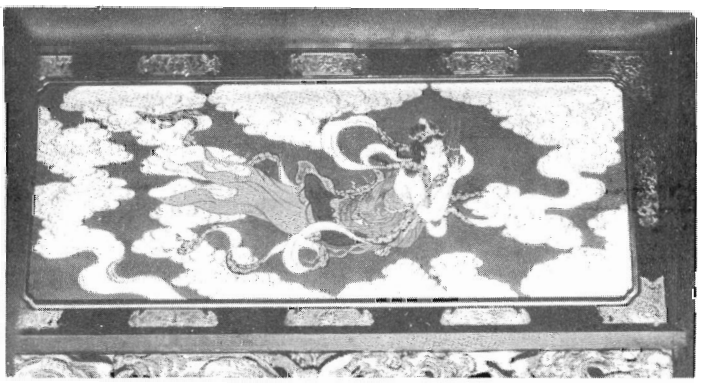


一〇六、日野睡鶴　群鶴之図

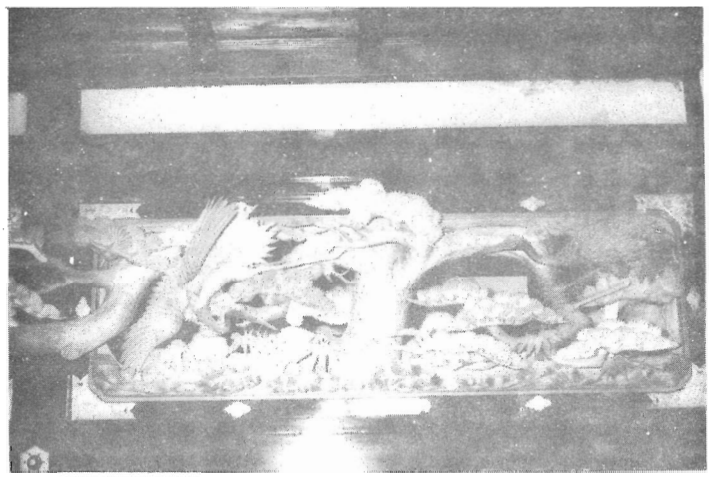


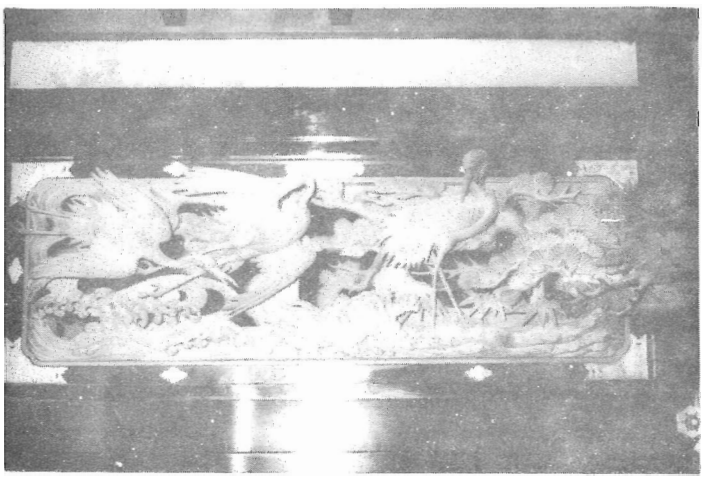
一〇七、西脇蘭渓　天女の図　峡門

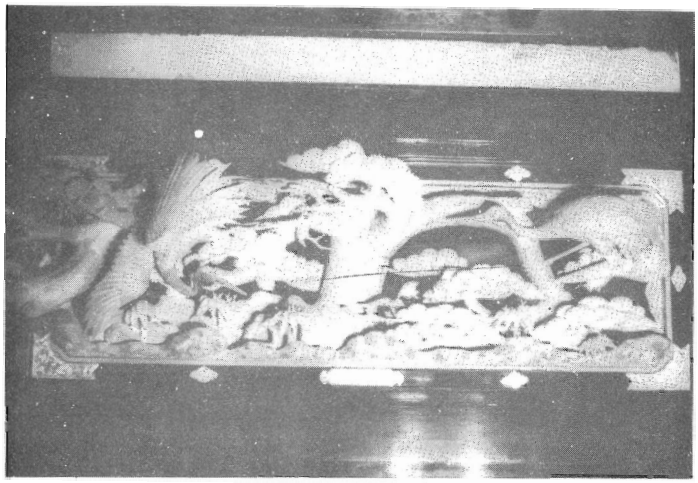


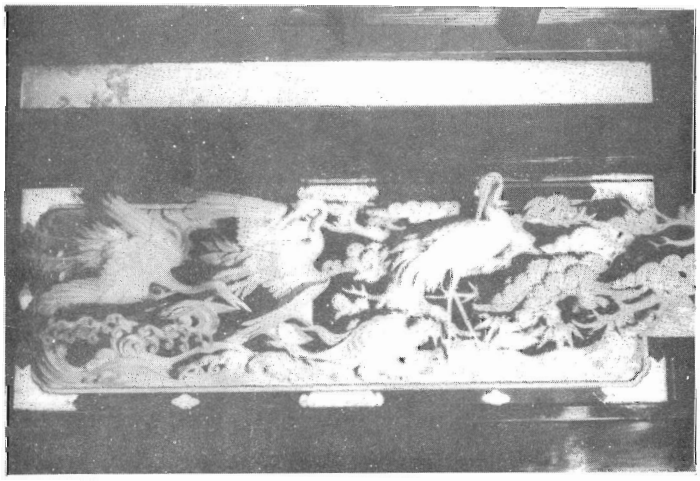


一〇八、彫忠刻　松上鶴之図狭間

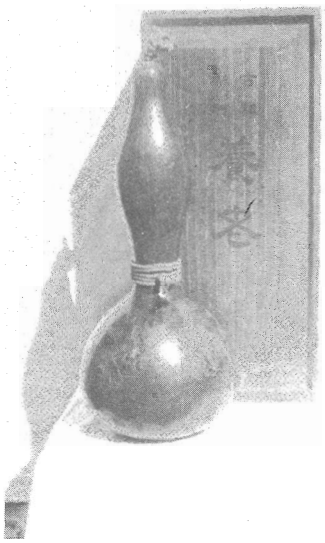




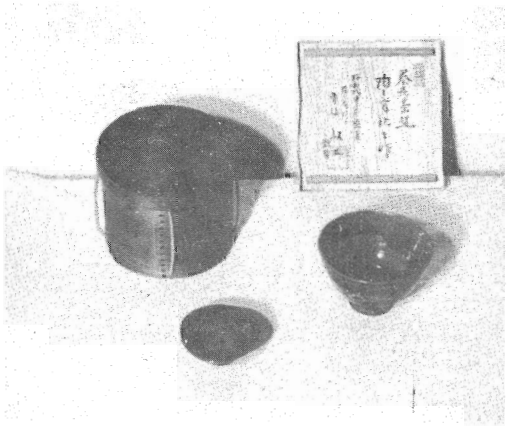




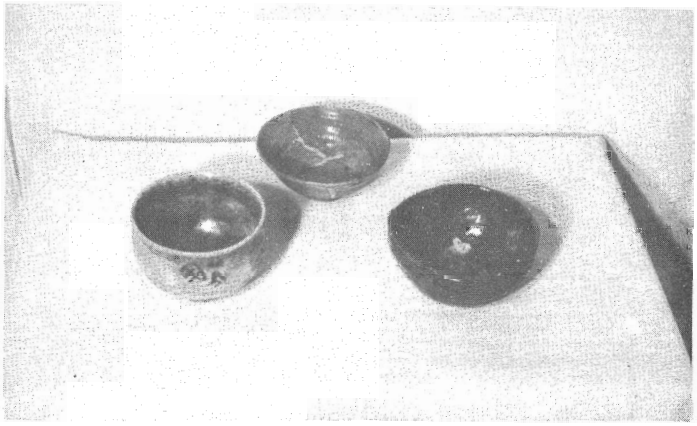
一〇九、徳山探華刻　養老勅使之図古瓢



一一〇、大橋秋二造　養老野菊絵茶碗



一二、養老素心焼



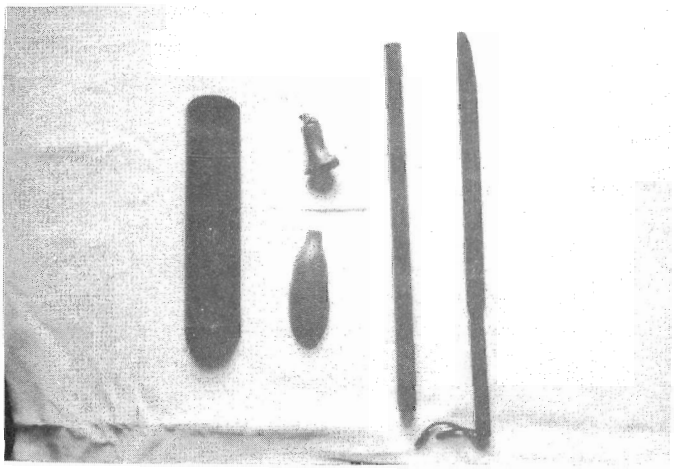
一三、新養老焼



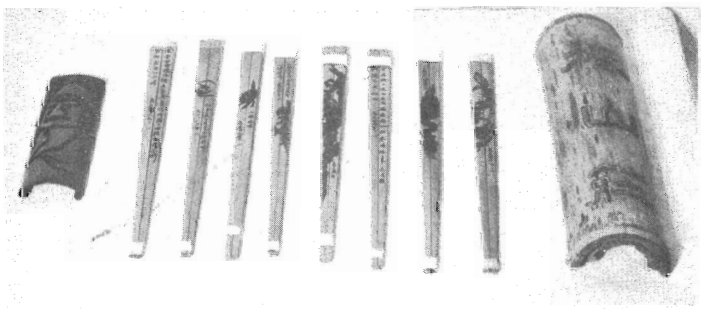
一二三、傍島養雲絵会席膳

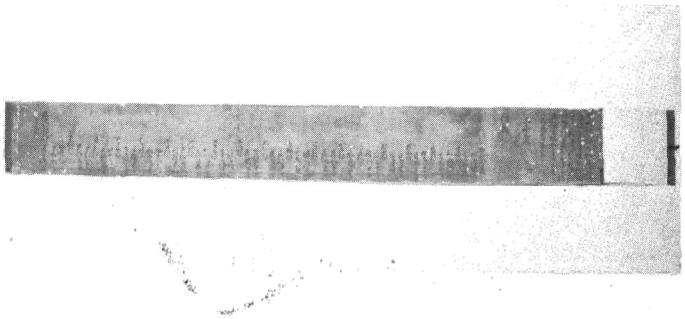


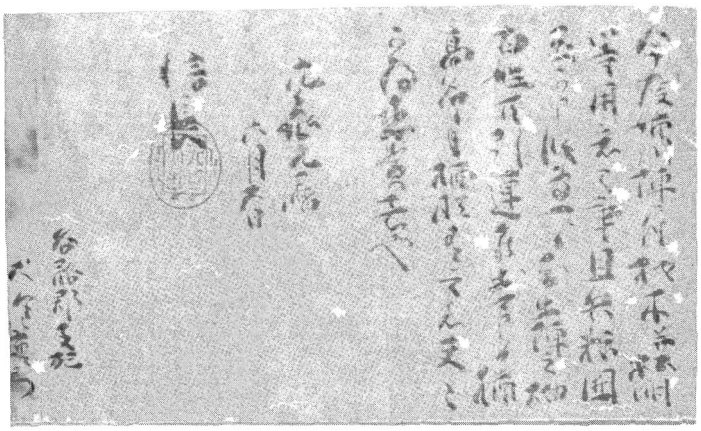
一二四、徳山探華刻　竹製品



一二五、田中景石刻　竹製品



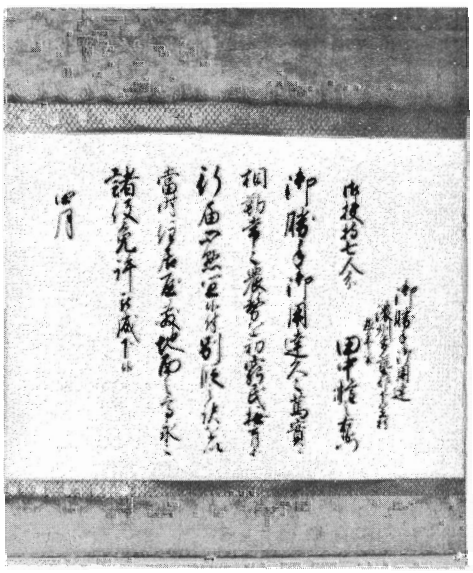






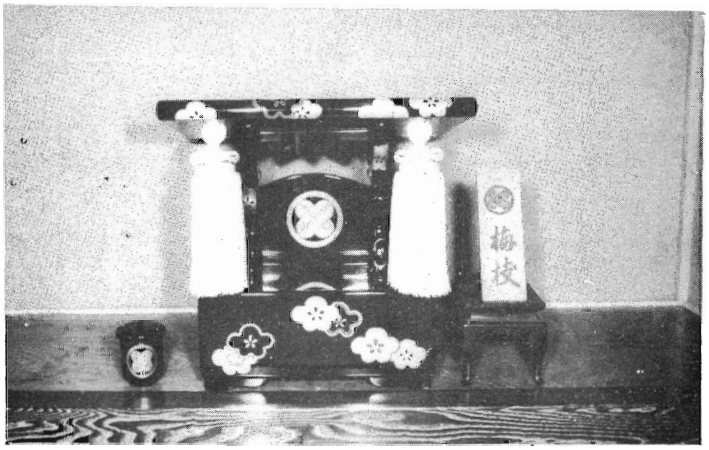






一一七、田中権之石衛門　許状

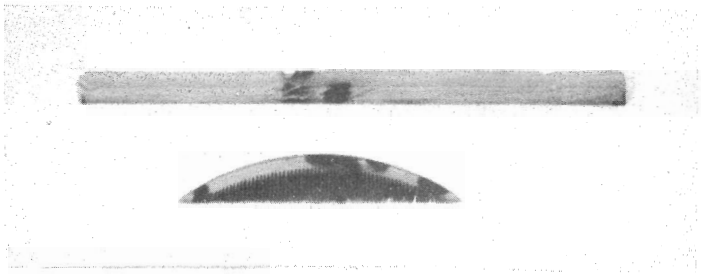
一二八、　田中勘六　浄瑠璃見台



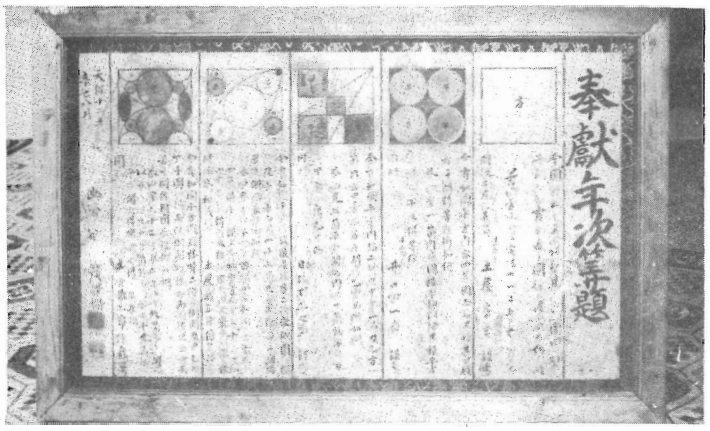
一二九、　鬼面山谷五郎　馬術免許状



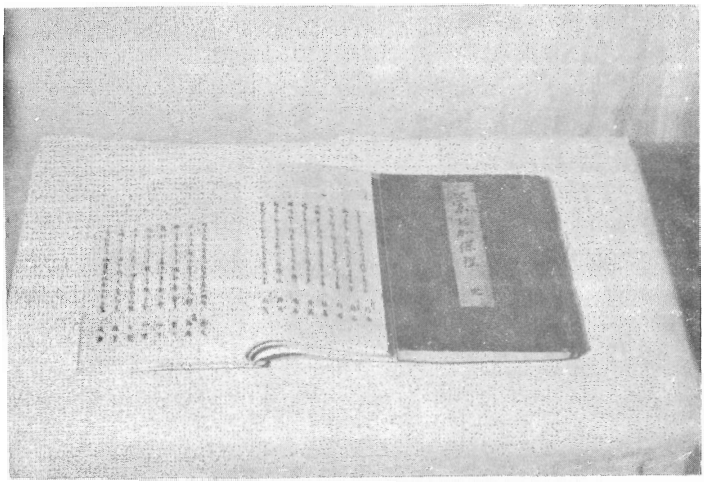
一三〇、　天野ゆり　毛利大納言拝領櫛笄



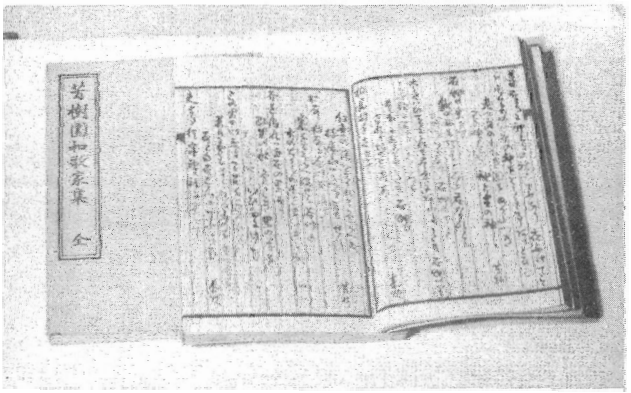
一三一、田代神社奉納算額



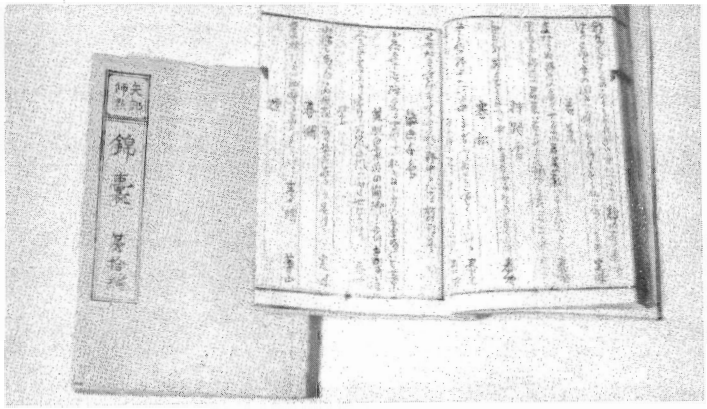
一三二、俳句集「蘭の加保理」



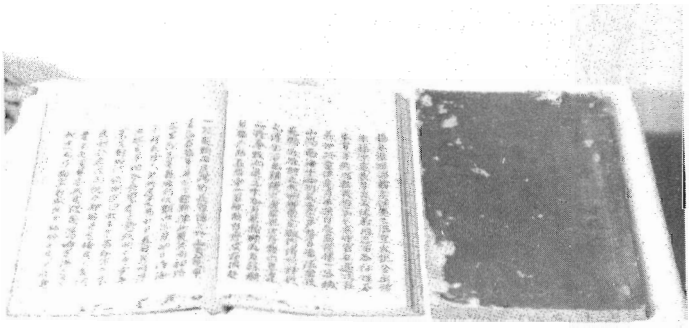
一三三、大橋芳樹和歌集



一三四、和歌集「錦嚢」



一三五、伊藤逸翁　大日本史引書



一三六、高橋千里　習字帖



一三七、森伴入　古文書



一三八、田中甚右衛門　古文書



一三九、養老開設資料



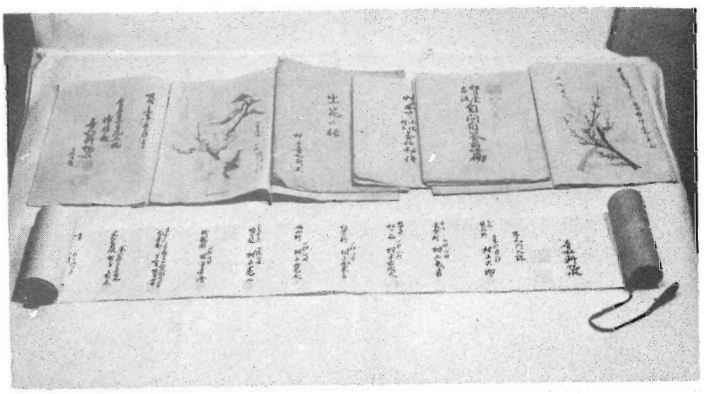
一三〇、松適舎鶴子　生花伝書



一三一、友松軒其鶴　生花伝書



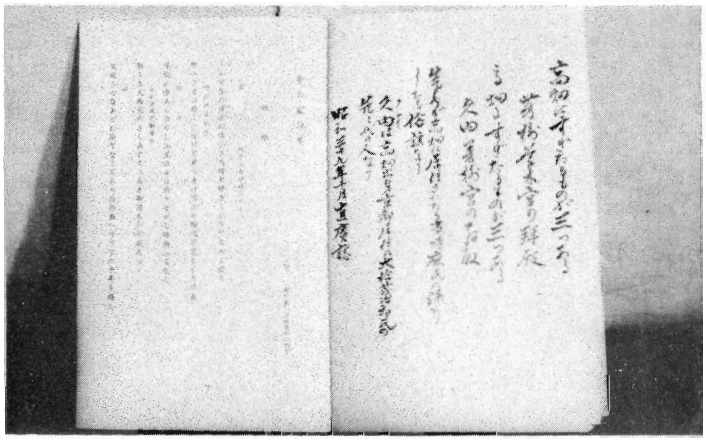
一三二、青松軒旭水　生花伝書門人録



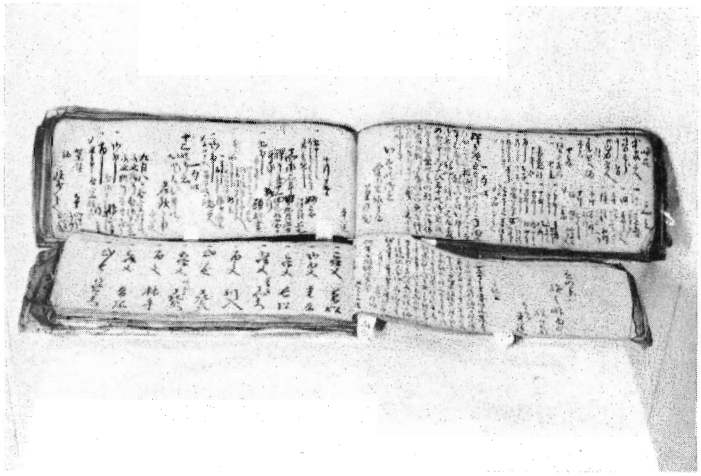
一三三、鷲森軒　松月堂古流伝書



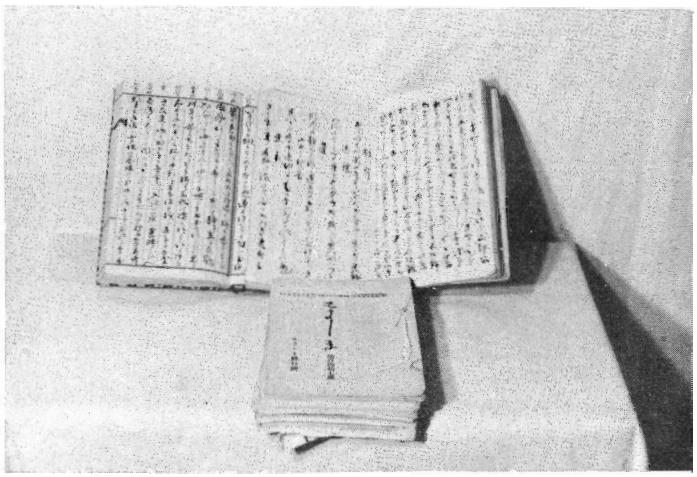
一三四、大橋真広　遺稿



一三五、日比車運　古文書



一三六、大倉雅之　花ことば



索引

詩書（写真番号）……（頁）
一、二、三、……1
四、五、六、七、八、九、……2
一〇、一一、一二、……3
一三、一四、一五、一六、一七、……4
一八、一九、二〇、二一、二二、……5
二三、二四、二五、二六、二七、……6
二八、二九、三〇、三一、……7
三二、三三、三四、三五、三六、……8

和歌・俳句……9
三七、三八、三九、四〇、……9
四一、四二、四三、四四、……10
四五、四六、四七、……11
四八、四九、五〇、……12
五一、五二、五三、……13
五四、五五、五六、……14
五七、五八、五九、……15
六〇、六一、……16
六二、六三、……17
六四、六五、……18

絵画……19
六六、……19
六七、……20
六八、六九、七〇、……21
七一、七二、七三、……22
七四、七五、七六、七七、七八、……23
七九、八〇、八一、……24
八二、八三、八四、八五、……25
八六、……26
八七、八八、……27
八九、九〇、九一、……28
九二、九三、九四、九五、……29
九六、九七、九八、九九、一〇〇、……30
一〇一、一〇二、……31
一〇三、一〇四、一〇五、一〇六、……32
一〇七、……33

工芸……35
一〇八、……35
一〇九、一一〇、……36
一一一、一一二、……37
一一三、一一四、一一五、……38

遺品・遺稿……39
一一六、……39
一一七、……40
一一八、一一九、一二〇、……41
一二一、一二二、一二三、……42
一二四、一二五、一二六、……43
一二七、一二八、一二九、……44
一三〇、一三一、一三二、……45
一三三、一三四、……46
一三五、一三六、……47

◎詩　書
（解説番号）　（頁）
一、二、三、……49
四、五、……50
六、七、八、九、一〇、……51
一一、一二、一三、一四、一五、……52
一六、一七、一八、一九、二〇、……53
二一、二二、二三、二四、二五、……54
二六、二七、二八、二九、三〇、……55
三一、三二、三三、三四、三五、……56
三六、……57
◎和歌・俳句
三七、三八、三九、……57
四〇、四一、四二、四三、四四、四五、……58
四六、……59
四七、四八、四九、五〇、……60
五一、五二、五三、五四、五五、五六、……61
五七、五八、五九、六〇、六一、……62
六二、六三、六四、六五、……63
◎絵　画
六六、六七、六八、六九、……64
七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、……65
八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、……66
八八、八九、九〇、九一、九二、……67
九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、……68
一〇〇、……69
一〇一、一〇二、一〇三、一〇四、一〇五、一〇六、一〇七、……70
一〇八、一〇九、一一〇、一一一、……71
一一二、……72
◎遺品・遺稿
一一六、……72
一一七、一一八、一一九、……73
一二〇、一二一、一二二、一二三、一二四、一二五、……74
一二六、一二七、一二八、一二九、……75
一三〇、一三一、一三二、一三三、一三四、……76
一三五、一三六、……77

詩書

一、大牛和尚　詠詩七絶　小倉　観音寺　殿蔵

小倉山観音寺の開山、元南濃町河戸の小笠原子爵家の菩提寺寒窓寺の住職であったが、享保年間小倉村に観音寺を開き隠棲した。禅僧として高名である。享保十年六月二十六日歿。

二、安田老山詩書　高田　藤田賢三氏蔵

名は養、老山又は萬里翁と号す。文政十一年養老山下に生る。家もと高須藩の侍医にて父は泰元という。老山始め医学を修め、資性豪爽、酒を嗜み、吟詠を好み、書画を善くした。初め長崎に至り鉄翁に就き南画を学ぶ。元治元年妻を携えて支那に航し、胡公寿を師友として大いに得る所あり、その間両浙の名勝を遊歴し画境を進めた。明治六年帰朝し東京に住す。時恰も文人画盛行の時に乗じ、奥原晴湖等と意気相投じ、大いに清朝風を鼓吹した。明治十五年歿。

三、井口寿山遺墨　高田　百々　茂氏蔵

名は仙治、寿山と号す。高田の人、享保十一年六月十六日生る。書を能くし又和歌に長じた。養老山下に百歳の長寿を保ったゆへその名遠近に喧伝せられ、文政八年三月に大垣藩御領役所から「百姓仙治、其方事長寿に付御手当の儀江戸表に相伺候処今般米拾俵被下候旨大久保加賀守様被仰渡候段村垣淡路守様被仰渡云々」の黒印を戴いた。又嘗て尾州公に召され「子も孫も彦もやしはも百歳の祝するまで我も生きなん」と御前揮毫し、同時に

召された渭竹（男）維幹（孫）欽（曾孫）さく（玄孫）がその傍に寿福康寧の四文字を書いた。翁は長寿で風流であったから文人墨客の訪問絶えず、而も翁自ら楽隠居たるに甘んぜず、翌年百一歳にて京阪に遊び、文人雅客を歴訪したが文政九年八月四日大阪において客死した。

四、柏淵蛙亭蛙画賛

高田　柏淵　節氏蔵

名は嘉一、字は純甫、通称藤太夫、蛙亭と号し、又修斉の別号もあった。高田の人、天明五年四月に生る。氏は殊の外養老谷の蛙鳴を愛し、その清亮さを楽んで「渓蛙歌」の詩を作り、最も名作との定評があった。又千秋笙峯、日比野草川と共に白鷗社の同人となり、常に大垣に会し、梁川星巌、村瀬藤城、張紅蘭女史、江馬細香女史等と詩文を講習論攻した。更に京阪の地に遊び、頼山陽、貫名海屋、篠崎小竹等当代一流の文士と交わり、経史国学は馬淵嵐山、鬼島広蔭等に就いて学び、又武技弾琴謡曲にも長じたが、一面家法を守り質素を旨とし奢侈を戒め、克く一家を斉えた。西暦一八三五年天保六年七月歿。

因に蛙の画は、中村正幸の筆、名は正幸、通称久次郎、周平、春畝と号す。酒の醸造を営み、近郷は勿論伊勢方面に販路を有した。性書画骨董の趣味深く、生花、茶道、囲碁、将棋、謡曲にも優れていたと伝へられる。同町内の柏淵蛙亭と交わり善し、この合作もその証左であろう。天保十一年五十八歳歿。

五、柏淵貫斉詠詩七絶

高田　中村準一氏蔵

名は才蔵、諱は時憲、字は聖郷、貫斉と号す。高田の人、宝暦九年正月柏淵彦右衛門の三男に生る。氏は天性恭倹淳朴の人で、而もその行は義に違うことなく、交際は信を失ふことなし。祖先に敬事し、忌辰に値う毎に祭祀を厳修した。殊に日常生活を節約し窮乏を賑恤した。終生家事を治め村務に奔走し、寛政以後村老の職に任じ

た。然も文武の道を修め、郷土の子弟に経史を教え、刀槍を習う者数十人に及び、詩歌書画ともに趣味深く、晩年は和歌を主とした。天保二年十一月七十三歳歿。

六、柏淵蛙亭蛙画賛　高田　中村準一氏蔵

七、井口寿山遺墨　養老町中央公民館蔵

八、柏淵蛙亭詩書　高田　柏淵　節氏蔵

九、戸倉竹圃　詠詩七絶　飯木　丸毛善吉氏蔵

通称六郎、竹圃と号す。本姓水谷氏、十九歳のとき耕月庵戸倉六之丞に迎えられ養子となる。養父の信任厚く俳歌の教をうけたが、性来詩書を好み、深夜窃かに書室に籠り、黙読研究した。詩文を能くし、書道にも巧みで、森春濤、大槻磐渓等と交遊があり、養老山房詩鈔二巻などを著した。明治十四年九月二十七日五十歳歿。

一〇、柏淵耆山　詠詩七絶　高田　柏淵千里蔵

名は拙蔵、耆山と号す。高田の人、文政元年四月に生る。博覧強記の人、頼山陽の高弟中川祿郎に就き漢学を修め、学徳ともに高く、近郷の子弟で氏の教をうけた者が頗る多い。高田小学校の創立当初の校名、「藍田」は氏の命名による。又氏は明治初年全国学区制における第三十一番中学区の取締の重責に任じた。明治十三年養老公園の開設に当り、発起人の一員として功労があった。明治三十三年十二月八十三歳歿。

一一、富長蕉雨　詠詩五絶　室原　長願寺殿蔵

名は覚静、室原長願寺住職。小学校を卒業後九州豊後日田の広瀬淡窓の咸宜園において漢学を専攻し、生涯布教を任とし東西に教化した。晩年に県会議員に出馬し、現職のまゝ昭和五年七月十七日六十一歳歿。

一二、柏淵着山　詠詩七絶　高田　柏淵千里氏蔵

一三、憩山和尚　一行書　養老　水野信弘氏蔵

姓は巨富、憩山と号す。小倉観音寺第十世住職、元関市の大雲寺、揖斐郡船子の平安寺、不破郡宮代の大慈寺の住職を歴任し、小倉観音寺の住職となる。禅僧として知られ、書道抜群であった。明治三十八年三月十二日歿。

一四、虎渓和尚　一行書　鷲巣　藤塚仁郎氏蔵

姓は東海、名は文益、虎渓と号す。元揖斐郡船子の平安寺の住職であったが養老鉄道開通後招聘され養老に隠棲し、専ら菊作りの名手として世に広く知られた。昭和三十七年一月二十四日九十三歳歿。

一五、藤井専随　一行書　室原　川地民夫氏蔵

安久正覚寺十六世住職、明治六年十二月五日に生れ、昭和二十六年八月十八日歿。

明治三十四年第五高等学校を卒業し、同三十七年東京帝国大学文学部哲学科を卒業し、旅順工科学堂教授、愛知県第一中学校長その他官公私立専門学校長を歴任四十年。アメリカ、ヨーロッパ教育を視察し、従四位勲四等を授く。又昭和二十四年権僧正に補せられ、上座に班せられ、同二十六年には特殊功章を授けられた。著書として

「梅園全集」上下二巻、「欧米の教育と文化」等あり。

一六、高木政勝　詠詩七絶　橋爪　村上肇氏蔵

名は政勝、樵山と号す。弘化四年九月橋爪に生る。幼にして学を好み、村上杏園、柏淵拙蔵に就いて学び、明治二年広瀬淡窓の門に入る。二十歳の時、近江国堀田藩の儒臣となる。明治六年東京に出で、私塾を開き、法律を修め弁護士となる。後仏門に入り、諸国を布教す。大正五年三月十六日七十歳歿。

一七、仝　詠詩七絶　橋爪　大岡信雄氏蔵

一八、徳山探華　教育勅語額　柏尾　大橋弥作氏蔵

名は、泰澄、探華、又は可楽斉と号す。出生地牧田より養老公園に移り住み、書画篆刻に巧みであった。昭和十一年六十一歳歿。

一九、日野霊泰　書　直江　日野泰道氏蔵

直江蓮光寺第十三世住職、文政五年六月に生る。性温和、身体肥壮にしてその分量一百二斤、腰囲三尺七寸、常に生花を好み植松少将より松月堂古流の免許を得たり。又若くして高倉学寮に学び仏学を究む。明治二十一年九月五日歿。

二〇、藤井専随　詩書　室原　遵沢寺殿蔵

二二、田中鋤雲　詠詩七絶　鷲巣　田中　孝氏蔵

名は董、鋤雲と号し、家号を鋤雲館又は瀑音舎と称す。鷲巣の人。漢詩が巧みであった。明治三十二年十月より大正十二年郡制廃止に至るまで五期二十年養老郡会議員に任じた。昭和十一年歿。

二三、藤井専随　書額　飯田　安藤　清氏蔵

二三、高木秀岳　堪忍袋画賛　横屋　加藤桂市氏蔵

一色西林寺第十七世住職、漢籍古事に精通し、非凡な才能をもち、書画に長じ高嘆の号もあった。布教師として広く足跡を残した。昭和十年六十六歳歿。

二四、大久保勁節　書　北野　野村準一氏蔵

名は精一郎、勁節と号す。文久元年十一月十八月橋爪に生る。佐藤牧山に就いて漢学を修む。明治二十四年より同二十八年まで岐阜県会議員。明治三十五年より昭和七年まで日吉村長日吉村会議員、明治四十年より大正十二年まで養老郡会議員を勤め、その間大正八年より同十二年まで養老郡会議長に任じた。昭和七年地方自治功労者として表彰せられ、同年五月二十九日突然の死により、村葬が行はれた。又氏の功績を称え御霊神社の境内に顕彰碑が建てられた。

二五、仝　書　橋爪　大久保精一郎氏蔵

二六、日比愚庵書　沢田　日比正夫氏蔵

名は文蔵、愚庵と号す。沢田の人。書を能くす。明治三十年より養老郡会議員を五期勤め、その間明治三十六年十月より同四十年九月、同四十年十月より同四十四年九月、大正四年十月より同八年九月まで三期間同郡会議長に任じた。

二七、寺倉正三一行書　小倉　日比喜久子氏蔵

横屋の人、元陸軍中将勲一等、陸軍幼年学校を出て、陸軍大学校を首席で卒業し、幕僚の要職を経て東京防衛司令官を最後に終戦を迎えた。昭和三十九年七月七日歿。

二八、谷沢映静赤壁之詩　室原　蓮沢寺殿蔵

明治二十八年二月一日谷沢民静の長子として生れ、学業中ばにて大正七年八月十日歿。

二九、大久保休吾書　橋爪　大久保守正氏蔵

橋爪の人、独学にて検定試験に合格し、二十七歳にして小学校長となる。大正十年三月三十一日笠郷小学校長を退職し、養老郡社会主事兼地方改良協会主事となり、同十四年養老郡志を編纂した。昭和十一年八月二十日六十歳歿。

三〇、中島徳軒詠詩七絶　鷲巣　中島嘉樹氏蔵

名は滋樹、徳軒と号す。鷲巣の人、養老郡内にて約二十余年間教職と校長を勤め、詩書を能くした。昭和十九

年七十七歳歿。

三一、徳山探華　百福百寿双幅　橋爪村上肇氏蔵

三二、谷沢民静　横川法語　室原蓮沢寺殿蔵

名は民静、瑞巌と号す。元治元年十一月二十九日室原に生る。蓮沢寺第十六世住職、昭和十一年九月三十日歿。

三三、仝　書　室原川地民夫氏蔵

三四、日比楓谷　詠詩七絶　小倉日比喜久子氏蔵

名は友三、楓谷と号す、小倉の人、琢三の長子として生る。幼少より書を能くした。昭和三十五年九月三日歿。

三五、中村金翠　詠詩七絶　高田中村準一氏蔵

名は久次郎、金翠と号す。高田の人、安政五年九月十日、元上多度村三郷、田、中村清右衛門の男として生る。幼にして久次郎家に養われ、養父の歿後襲名す。幼き頃、奥州の書家桂所を長く止宿せしめて師事し、書道に巧であった。明治五年五月全国に戸長制度が施行せられ、明治十三年頃から同十四年頃まで、島田村外一ヶ村の戸長に推され、明治二十二年七月町村制が布かれて高田町となり、三十年四月一日から数日間町長事務取扱者となったこともあり。又大垣共立銀行高田支店が設けらるゝや初代支店長をも勤め、長きに亘って町会議員として公共のために尽した。昭和六年五月二十日七十四歳歿。

三六、田中景石書　　鷲巣　藤田　薫氏蔵

名は雄三、景石と号す。鷲巣の人、囲碁将棋に堪能、書道を修め多くの子弟を教え、尚彫刻も巧みであった。昭和三十三年十月二十八日歿。

和歌俳句

三七、徹書記歌　　高田　成瀬信行氏蔵

名は正徹、字は清巌、姓は紀氏。東福寺に入り僧となり書記を勤め、依って徹書記と号す。人となり和歌を嗜み、その詠むところ三万余首、詠草三十六帖に及び、これを熊野に蔵めたが、自らまことに益なきことゝ称し尽く焚き棄てた。後にこれを悔い復詠ずること二万余首、これを草根集と名づけ、その後も詠草堆積し、晩年これを編し草根続集と名づけた。この外に徹書記物語、清巌茶話、慰草などの著がある。

或る時「中々に　みぬもろこしの　鳥はこし　桐の葉おとせ　秋の夜の月」と詠じ、これ即ち上を誹り、代を謗るものとて京洛の住居を追放され、行雲流水、美濃国に到り荘福寺に留った荘福寺に寄寓中、異郷にあって都の空が懐かしく、七月の盂蘭盆会に「中々に　なき魂ならば　古里に　帰らんものを　今日の夕暮」と詠じ、この歌天聴に達し、正徹の哀情を察したまひ、勅勘を免され帰洛した。西暦一四五八年長禄二年五月七十九歳歿。

三八、仝　　和歌　　高田　荘福寺殿蔵

三九、田中道麿　和歌　　田中道麿翁顕彰会蔵

幼名は茂七、後に庄兵衛、生地に因み榛木翁とも称し、薙髪して道麿又は道全と号した。幼にして学を志し、

初め大菅中養父に師事し、後賀茂真淵に就き只管萬葉集の研究に力を致したが、真淵の歿後、安永九年本居宣長の門に入り、遂に撰集萬葉抄、萬葉名所歌集、萬葉東語栞、萬葉類句歌抄、萬葉答問書などを著した。後に名古屋の桜天神境内に塾を開き、門人三百余人に及ぶという。昭和三十二年十月四日郷土の有志相謀り、翁の生誕地に縁ある源氏橋畔に顕彰碑を建立した。西暦一七八四年天明四年十月四日六十一歳歿。

四〇、仝　和歌　田中道麿翁顕彰会蔵

四一、仝　歌　田中道麿翁顕彰会蔵

四二、仝　和歌　田中道麿翁顕彰会蔵

四三、仝　和歌短冊　高田　柏淵　節氏蔵

四四、柏淵石門　和歌　高田　柏淵　節氏蔵

名は有儀、字は公象、柏淵平治の次子、人となり剛武で武を好み、大垣藩士正木太郎太夫利元に師事して武技を修めた。宝暦十一年に禁闕護衛の与力となり、近畿の藩士等の従って剣槍を学ぶもの数百名に及ぶという。著書に武功論五巻あり。

四五、柏淵静夫　和歌　高田　柏淵　節氏蔵

名は重寧、字は士安、幼名勇太郎、通称静夫、樅園と号す。文化十年十月二十八日柏淵蛙亭の子として高田に生る。幼少より読書を好み、漢学は父祖及び馬淵嵐山に学び、国文は鬼島広蔭に師事し、和歌作文ともに巧みで、

殊に語学に精通した。長じて岡部、本居など大家の著書を読み、専ら神典を研究した。天保八年以来二十六年間数村に及ぶ里正の職を執り、曾て大垣八幡社の祠官補に任じ、南宮神社の禰宜を十三年間勤め、嘉永三年六月には大垣藩主より、賀正及朝幕帰城の節謁見を許され、次いで万延元年三月幕府から氏を公称することを許された。又明治十三年養老公園の開設にあたって、発起人十名の一員として功労があった。明治二十五年七月十二日八十歳歿。

四六　大橋芳樹　和歌　　高田　大橋正広氏蔵

天保三年十一月十九日江戸小石川秋元家に生れた。幼名は八百吉、弘化元年麗水庵雪山に就いて俳諧の元歌を学び麗海と称した。嘉永元年幕士下振本之助について和歌を修め、杵屋六松の弟子となり今様の長唄を習ひ、芸名を芳村孝太郎と称した。同二年名を改め三平と称し、実名を正麗、字を重明と改めた。同三年竹山紋蔵及塩田龍潭に従い書道を研究し、同五年火災に罹り、千駄ヶ谷、板橋、豊島郡志村などに転住し、子弟に読書習字を教授した。元治元年中条中務大輔信礼につき皇学の奥儀を修め、関宿の金谷直恒により和歌を修練した。明治元年駿遠参を遊歴し、遠江国普大寺に入り、出家して普化僧となり芳樹と称した。明治五年諸国雲遊の末、日吉村橋爪村上京五郎と知り、還俗して名を平三郎と改め、同年四月多芸村高畑道場に移り、同地の大橋伝三郎の嗣子となり、大橋氏を冒す。同六年日新、敬業、文開、致遠の四義校の教師となり、同年神職の試験に及第し、同七年郷社多岐神社の祠掌となり、後同社の祠官を拝命。同九年田代神社の祠官に任ぜられ、総て五郷二十八箇村の神職を勤務し、その在職三十余年に及ぶ。此間南宮神社禰宜神道事務支局長、神職試験委員、神道中教院監督、皇典講究所委員などを歴任し、神事に貢献した功績は偉大であった。明治三十八年八月二十八日七十四歳歿。

四七、村上其鶴　俳句　　橋爪　村上肇氏蔵

名は拙男、其鶴は俳号、村上喜一郎の長子として生る。性俳諧を好み俳友極めて多く、常に諸国を遊歴し、明治二年象尾山麓に芭蕉の句碑を建立した。又松月堂古流の生花に堪能であった。明治十八年一月二十七日六十一歳歿。

四八、句会寄書　竹圃その他　　橋爪　村上肇氏蔵

四九、村上旭水　俳句　　橋爪　村上肇氏蔵

名は真一、青松軒旭水と号す。橋爪の人、村上喜一郎の四男として生れ、本家を継ぐ。幼少より生花を好み、柏原の五大坊鶯嶺に師事し、松月堂古流を修め、自らも深く研鑽し、大日本総会頭となり、家元植松子爵の顧問として流儀の普及に尽し、多数の門人を指導した。依って門人たちその徳を慕ひ、象尾山上に記念碑を建立した。又俳句を嗜み、煙火が巧みで全国各地の煙火大会へ出品し、多く入賞している。こゝに掲げる辞世の句に、「櫓も櫂も　いらぬ他力の　弘誓船　南無阿弥陀仏の風の力で」大正十年二月六日八十四歳歿。

五〇、西脇梅岡　俳句　　飯木　西脇茂雄氏蔵

名は善蔵、梅岡は俳号。飯木の人、俳諧を魯松庵に就いて修む。氏は源氏橋から寂しく落ちて行った源義朝を吟じ、「咲く花の　きざし含みて　落葉かな」の句碑をその由縁の地に建てた。明治二十九年十二月十一日七十七歳歿。

五一、中島賢教　和歌　鷲巣　中島嘉樹氏蔵

名は賢教、定平と称す。鷲巣の人、江戸時代の末期、即ち明治六年鷲巣に龍門義校が開校されるまで、長く寺小屋を開き多くの子弟を教育した。明治四十二年八十七歳歿。

五二、句会寄書　簾　橋爪　村上　肇氏蔵

五三、高木旭円　和歌　橋爪　念長寺殿蔵

応順寺第十五世住職。昭和十七年七月八日八十二歳歿。

五四、村上其鶴　俳句　橋爪　村上　肇氏蔵

五五、村上月荘　俳句　橋爪　村上　肇氏蔵

名は雄三、月荘と号す。槁爪村上喜一郎の五男に生れ、若い頃大垣の藩老小原是水に引立てられ従ふ。明治十三年養老公園の開園に当り、出でゝ旅館を創業す、寸人豆馬亭という。明治三十六年十一月八日六十八歳歿。

五六、村上鶴子　和歌　橋爪　村上　肇氏蔵

名は嘉間太、鶴子と号し、松迺舎と称す。村上真一の長子に生れ、若年より生花、和歌、雅楽、書道に長じ、殊に生花は父青松軒及五大坊鴻嶺について深く学び、将来五大坊職の候補と言われ、又政治面では自由民権を称え、板垣退助に師事したが明治二十四年二十六歳歿。

五七、藤田祐城　和歌　橋爪念長寺殿蔵

宇田西勝寺第十二世住職。後住職を弟に譲り本山の要職につき、傍ら全国を巡り布教に尽したが、弟の訃に接し再び寺に戻り、十四世を継ぎ本堂再建の大業を成就した。昭和九年一月十二日六十八歳歿。

五八、鼻橋慈鳳　和歌　橋爪念長寺殿蔵

橋爪念長寺等十三世住職、明治二十六年五十歳歿。

五九、鼻橋慈欣　和歌　橋爪念長寺殿蔵

橋爪念長寺等十四世住職、昭和十八年六十七歳歿。

六〇、加納完誠　和歌　橋爪念長寺殿蔵

金屋玉泉寺等二十六代住職、大正元年八月八日歿。

六一、日野泰順　和歌　直江　日野泰道氏蔵

名は泰順、文窓、睡鶴又は嘉永三と号す。日野霊泰の長子として嘉永三年に生る。直江蓮光寺第十四世住職。性和歌を好み、大橋芳樹、矢部文載に就き和歌を修め、同好の士を募つて歌の会「美屋飛乃友社」を創り、明治七年より大正七年まで凡そ四十五年間相続した。錦嚢又は錦袋はこの結社の歌集で、同人三十余の和歌を収む。又高橋杭水に南画を学び、後に京都に遊び蓮月尼から蓮月焼を習った。大正八年歿。

六二、日野泰充　和歌　直江　日野泰道氏蔵

日野泰順の長子、明治十六年九月十九日生る。蓮光寺第十五世住職、華厳教学の研鑽に努め、大谷大学の教授に任じ、真宗大谷派擬講、明治三十五年十二月三十日歿。

六三、佐竹直太郎　和歌　高田　成瀬信行氏蔵

明治四年四月二十五日郡上郡和良村上京の中島家に生れ、高田佐竹金作の三女分家佐竹たまの養子となる。遺詠の歌に千尋の号が見える。氏は終生政治家として養老郡のため治水土木の面に偉大な功績を遺した。即ち明治三十九年高田町会議員を振出しに、高田町助役、養老郡会議員六期、岐阜県会議員四期、同議長を歴任し、昭和三年二月衆議院議員に任じた。昭和二十一年十二月二十七日七十六歳歿。

六四、栗田秀畝　俳句　横屋　寺倉萬雄氏蔵

名は秀夫、秀畝は俳号、有尾の人、幼少より俳諧を好み、三輪一子に就き学び、高浜虚子のホトトギス、白月のサヾンカ、立子、玉藻などにより研鑽し、昭和二十七年鶏二主宰の雪の同人に推され、多くの名句を遺した。昭和四十年歿。

六五、日比三十木　和歌　小倉　日比久子氏蔵

小倉の人、明治大正昭和の三代にわたり、三十年間小学校の教職と校長を勤め、後神職となり神事に貢献した。

絵画

六六　日比野鶴翁　彩色花鳥絵襖　高田　景陽寺殿蔵

名は景亮、字は公明、鶴翁と号す。高田の人日比野草川の父、明和元年（一七六四年）に生る。岐阜の鶴州に師事し沈南頻派の画法を修得し、更に刻苦精励し遂に一家を成し、晩年に及び豪放雄勁の域に達した。その遺作は高田を中心に各地に多く、就中高田愛宕神社拝殿天井の雲龍墨絵、同景陽寺の極彩色花鳥絵襖、同専念寺の水墨山水絵襖などは大作である。尚翁が帰依し長らく寄寓した伊勢一身田高田派本山専修寺には、翁の最も傑作と定評ある絵が寺宝として保存されている。弘化四年八十四歳歿。

因に、沈南頻は清の呉興の人、名は詮、字は衡齋、長崎へ来り留ること三年、画を善くし、花鳥に長じ、蘭竹梅菊に巧みであった。妍麗秀沢能く時目を悦ばし、ために国中から争って入門し、その画法を習ふ者多しという。

六七　仝　水墨山水図襖　高田　専念時殿蔵

六八　西脇蘭渓　極彩色孔雀図襖　高田　専念寺殿蔵

名は季三郎、正栄と称し、蘭渓と号す。龍泉寺の人、西脇武治右衛門の子、幼くして京都の岡本豊彦に入門し、画業を修めた。且つて今尾の某家に養子となつたが、大洪水に遇ひ生家に復縁した。明治十五年二月十九日七十三歳歿。

六九　日比野鶴翁　水墨山水頼山陽賛　高田　日比野　泰氏蔵

七〇、西脇蘭渓　彩色孔雀図襖

七一、日比野鶴翁　水墨山水図　高田　専念寺殿蔵

七二、〃　遊鯉之図　高田　中村準一氏蔵

七三、〃　水墨山水図　高田　日比野泰氏蔵

七四、〃　仙人之図　高田　栗本雄氏蔵

七五、〃　養老真景図　高田　日比野泰氏蔵

七六、〃　白梅之図　広畑小学校殿蔵

七七、〃　梅花書屋星巌賛　有尾　田中恵明氏蔵

七八、〃　梅月之図　高田　柏淵節氏蔵

七九、郷土文化人遺墨貼交　衝立　飯木　香川義昌氏蔵

八〇、鬼面山谷五郎　錦絵　高田　大橋正広氏蔵

文政九年鷲巣に生れ、名は新一、父は新七、母とら、天保五年九歳のとき、父に従って養老寺に移り住み、酒の醸造などを手伝った。その後長浜の石屋へ奉公に出たが、体格剛強膂力人に過ぎたから、京都相撲の浜碇丈右衛門　飯木　西脇庄吉氏蔵

の知るところとなり、相撲道に入った。京都で三年修業した後、嘉永四年江戸相撲武隈文右衛門の部屋に入門し、翌五年春、東幕下二十一枚目に付け出され江戸の初土俵をふんだ。翌六年に弥高山鉄之助と改名、安政四年には東六枚目で入幕、阿州蜂須賀侯のお抱えとなり、鬼面山谷五郎と改名した。さらに文久二年の冬に関脇、慶応元年の冬には大関、翌二年春には張出として出場、明治元年冬場所に全勝して、同二年二月遂に横綱免許、同三年春引退するまで幕内生活十四年間、相撲史に輝やかしい記録を残した。明治四年七月二十三日四十七歳歿。

八一、諸大家合作養老真景木版画　公園　村上弁二氏蔵

中林竹洞、谷文晁、山本梅逸、張月樵、渡辺清など当代一流の大家合作の養老真景の図に、郷土の文化人、柏淵嘉一（蛙亭）、柏淵道恒（春屋）、早野有章が夫々詩を録している。

八二、西脇蘭渓　瀑布之図　柏尾　柏尾静円氏蔵

八三、〃　秋景山水図耕月庵賛　栗笠　高槁嘉幸氏蔵

八四、〃　梅林山水図　船附　法覚寺殿蔵

八五、〃　養老真景図　飯木　近沢孝夫氏蔵

八六、〃　人物画六曲屏風一双　橋爪　村上喜代志氏蔵

八七、大矢玉文　四季花鳥図屏風　安久　大矢常吉氏蔵

名は権左衛門、玉文と号す。安久の人、父玉秀について画を習い、又京都に出で修業をした。明治三十九年十一月二十九日八十三歳歿。

八八、　仝　　嵐峡之図屏風　　安久　大矢常吉氏蔵

八九、　稲葉墨池　　雲長顕霊之図　　高田　稲葉時男氏蔵

名は彦六、朝陽峯墨池と号す。稲葉一鉄十四代の後裔、文化五年八月十一日石畑に生る。幼名左馬人、文政九年京都に出で、画を御所御画所越前守岸駒に、書を桂宮家尾崎縫殿頭に、皇漢学を宝相院徳田将監に、俳諧連歌を多賀裏人に夫々師事し、蘊奥を極めた。明治二十五年二月四日歿。

九〇、　丸毛泉石　　米法山水図　　飯木　丸毛善吉氏蔵

幼名増吉郎と称し、大跡村耕月庵戸倉六之亟の長子として生る。長じて丸毛家を継ぎ、四郎兵衛兼忠と称した。画を高橋杏村に学び、泉石又は楓谷と号した。大正五年十月十二日七十一歳歿。

九一、　大矢玉秀　　龍虎之図屏風　　安久　大矢常吉氏蔵

名は権治郎、安久の人。京都の松村景文に就いて絵を習得す。天保八年九月二十六日三十九歳歿。

九二、　柏淵貫斉　　法彩人物山水図　　高田　柏淵節氏蔵

九三、児玉芳月　山水之図　柏尾　藤田澄子氏蔵

明治十六年一月柏尾児玉千代松の子として生る。若くして大阪に出で、画を土井義芳に学び、花鳥山水画を能くした。大正十五年三月七日郷里に於て四十四歳歿。

九四、西脇蘭渓　人物画　龍泉寺　稲垣司馬氏蔵

九五、富長蕉雨　兎画賛　室原　長願寺殿蔵

九六、児玉芳月　旭松鶴亀之図　柏尾　志知喜一郎氏蔵

九七、戸倉耕月庵　松上双鶴之図　飯木　丸毛善吉氏蔵

名は六之丞、白水、耕月庵と号す。大跡の人、専ら文墨に親み、四十歳にして家督を嗣子竹圃に譲り、嘉永七年蕉門十四世の道統を継いだ。明治四年二月十六日六十一歳歿。

九八、徳山探華　紺絹金泥出山釈迦画賛　橋爪　村上肇氏蔵

九九、栄馬麦人　揚柳観音画賛　蛇持　栄馬昭山氏蔵

本名栄馬徳了

明治二十六年蛇持、栄馬宗誠長男として生る。二才にて父と生別、三才、母親に死別　以来祖父母に養育さる。二十才祖母病死。二十四才祖父病死、大正四年－昭和十二年了覚寺住職絵の手解きは楼居？外

に彫刻、手芸品、書をよくする。昭和十二年七月病死、時に四十四才。

一〇〇、伊藤湖音　幽霊之図　安八　徳願寺殿蔵

安久徳願寺第八世住職、天明五年歿。

この図は、ある夜橋爪の檀家へ赴く途中、橋爪の三味にて幽霊の出現に出遇い、直ちに帰りて筆をとり画いたものと伝う。

一〇一、徳山探華　弁財天之図　橋爪　村上　肇氏蔵

一〇二、鈴木拙操　花鳥之図屏風　室原　鈴木芳郎氏蔵

名は芳衛、治左衛門と称し、拙操と号す。画を嗜み、水墨画を能くした。治水事業の功労者として知られた。昭和二十九年十一月十七日七十二歳歿。

一〇三、土屋輝雄　水辺（青龍展入選）　高田　土屋志う氏蔵

明治四十二年八月高田に生る。幼少より画を好み、京都の徳田隣斉の門下に入ったが、後青龍社に加はり、名古屋の市野享に師事し画業を修めた。県展に十数回、青龍展に十一回入選した。昭和三十七年三月三十一日五十四歳歿。

一〇四、仝　大黒天之図　高田　伊藤三郎氏蔵

一〇五、傍島養雲　青緑山水之図　橋爪　村上　肇氏蔵

名は弘亶、翠峰道人、後に養雲道人と号す。伝道を研修するとゝもに絵画の道に入り、始め原松蔭について南宗の画法を学び、後に半田の山本石荘について蘊奥を極め一家を成した。昭和三十五年五月三日七十九歳歿。

一〇六、日野睡翁　群鶴之図　直江　日野泰道氏蔵

一〇七、西脇蘭渓　天女之図狭間　中　応順寺殿蔵

工芸

一〇八、彫忠刻　松上鶴図狭間　直江蓮光寺殿蔵

彫物屋忠兵衛、高田大門に住す。天保十一年七月八日歿。法名釈慧深。二代目養子、安政元年八月二日歿。法名釈円鏡。

今から百四十年ほど前の彫物師で、遺作として有名なものは、こゝに掲げる蓮光寺の狭間の外、高田西町の軸東町の軸の彫物、或いは伊勢一身田専修寺の彫物などがある。

一〇九、徳山探華刻　養老勅使の図古瓢　鷲巣ちとせ殿蔵

一一〇、大橋秋二造　養老野菊絵茶碗　公園村上弁二氏蔵

名は秋二、松庵と号し、尾張津島の人。別名収二、収児、収翁、指雲児、聾耳、桝底の銘印を用う。京都の陶工尾形周平に就て陶技を修め、津島に帰り窯を築き製陶したが、晩年に至り養老に隠棲し、還暦にあたり野菊の絵茶碗六十一個を焼き、知友に配ったという。後にこれを養老秋二と呼ばれ、茶道界に珍重せられた。安政四年十一月二十日六三歳歿。

一一一、養老素心焼　茶碗　公園素心庵殿蔵

明治十五年名古屋の人、伊藤素心が養老菊水の地に草庵を構え、望む者に茶を供した。明治二十一年の頃、庭

先に窯を築き、手慰りの雅陶を焼きはじめた。これが養老素心焼と呼ばれ、茶人の間に賞玩された。大正九年六月十九日七十八歳歿。

一二三、新養老焼　鷲巣　立木貫一氏蔵

明治三十五年牧田村の大工小谷嘉市が、名古屋の前田鎌太郎と謀り、牧田に築窯し、牧田の陶土を以て製陶した。これを新養老焼と称した。これを引継いだ伊藤国太郎が、養老鉄道開通後の大正五年、養老駅構内北隣の地へ窯を移し、牧田の土を運び、吉川某と云ふもに専ら酒家八十郎家の依頼で、養老みやげ養老酒の壺を焼いた。旁ら茶器類や置物類を巧みに製作した。

一二三、傍島養雲絵会席膳　金屋　玉泉院殿蔵

一二四、徳山採華刻竹製品　橋爪　村上肇氏蔵

一二五、田中景石刻竹製品　鷲巣　木村嗣二氏蔵

遺品遺稿

一二六、織田信長　姉川陣回状　鷲巣　田中孝氏蔵

今度姉川陣に付材木並松明等用意之事、且兵糧囲置可申段専一に候分て出陣之砌百姓共引連罷出可申候。高名の手柄於有之者夫々可為恩賞者也

元亀元暦六月五日　　信長　判

多芸郡　田中四郎

大谷勘重郎

右十八郡村々早々順達宜有之者也　（他郡に属する分省略）

二七、田中権之右衛門許状　　下笠　小野清隆氏蔵

下笠の人、同家の系譜によると「人王五十九代宇多天皇九代の後胤佐々木源三秀義、十三歳にして六条判官為義の養子となる。保元平治の乱に義朝に随て功あり、四代末田中但馬守氏信田中氏の元祖となる。四代を経て田中備中守氏頼に至る。氏頼は近江国春稔の城主なり。云々」と。何時頃から下笠に住みしか詳かならず、子孫代々権之右衛門を襲名す。同家に関する嘉永七年までの文献あれど、今は廃絶し跡形もなし。

二八、田中勘六　浄瑠璃見台　　高田　田中四郎氏蔵

高田の人、大正九年より連続六回二十四年間高田町会議員に任じ、その間高田商工会長なども勤め、地方自治と勧業振興のため大いに貢献した。又趣味として浄瑠璃を好み、刻苦研鑽、全く素人の域を脱するほどであった。昭和二十三年十二月三十一日七十一歳歿。

二九、鬼面山谷五郎　馬術免許状　　鷲巣　田中義一氏蔵

一三〇、天野ゆり　毛利大納言拝領櫛笄　小倉　小倉みつゑ氏蔵

天保三年小倉に生れ、文久四年より約十年間、八神藩毛利大納言嫡子の乳母を勤め、この櫛笄を拝領した。

一三一、田代神社　奉納算額　高田　大橋正広氏蔵

一三二、俳句集「蘭の加保理」　高田　竹内春吉氏蔵

養老山下大跡邑の人。戸倉耕月庵の句集、耕月庵は文化八年に生れ、明治四年病歿す。芭蕉翁十四世の道統を嗣ぐ。「蘭の加保理」は道統賀莚を本巣郡北方町の西運寺において催された時、参会した全国遠近の風士、近郷の雅客から寄せられた俳句の集であり、京都寺町二条蕉門書林橘屋治兵衛の上梓に係るものである。なお耕月庵には「道の誠」「墨直集」「有喜久佐集」等の遺著もある。

一三三、大橋芳樹歌集　直江　日野泰道氏蔵

一三四、和歌集「錦嚢」　直江　日野泰道氏蔵

一三五、伊藤逸衛大日本史引書　高田　伊藤心雅氏蔵

幼名捨次、長じて左六郎、更に市右衛門と改め、老後逸衛と呼ぶ。字は正栄、東雲軒と号す。幼少の頃から書を好み、かくて御家流の書法に通じ、僅か十三歳の時既に数多の弟子があったと伝わる。御家流の書風は当地方にあって樋口代治を経て氏に代わり、遂に系統は絶えたという。氏は二十余歳のとき京都青蓮院の宮に仕え祐筆となった。又和歌を本居春庭、鬼島広陰から学び、広陰からは特に仮名遣を習得した。維新後は多芸上石津郡内

の乞いに任せ古書を講じたという。性質温厚で庄屋として村治に力を竭すこと四十二年の長きに亘り、水利土木にも多く貢献し、新よげの築造には心血を注いだ。明治二十三年二月二十八日八十二歳歿。

一三六、高橋千里習字帖　栗笠　高橋嘉幸氏蔵

名は千里、次兵衛と称し、字は士驥、雲華堂と号す。栗笠の人、尊円親王の書法を能くし、又謡曲が巧みであった。安政四年八月十九日歿。

一三七、森伴入古文書　田古川茂氏蔵

横屋の地頭で、慶長年間の人。

一三八、田中甚右衛門古文書　小倉栗田嘉三氏蔵

一三九、田中義一養老開発資料　高田田中功氏蔵

明治二十五年六月六日生る。高田の人、幼より頗る俊秀の資、大垣中学校を経て第一高等学校に入る。当時郷土の人たちその偉材を称えた。然るに父儀助の切なる悲願に従い中途退学し、帰郷して家業を継ぐ。郷党争でかこの逸材を仰がざる。乃ち大正九年と大正十三年高田町会議員に二期当選し、大正十一年八月二十六日高田信用販売購買組合を創立し組合長となり、自ら報徳会を起して報徳主義を鼓吹し、又養老郡青年団長として青年を卒い国家地方の興隆発展に尽し、昭和三年二月七日岡本喜十郎翁の記念碑建立を主宰し、尚史談社又は養老研究会を創り郷土史の開発に貢献し、多く貴重な文献を遺した。昭和五年三月十五日三十九歳歿。

一三〇、松酒舎鶴子　生花伝書　橋爪　村上　肇氏蔵

名は嘉間太、鶴子と号す。村上真一の長子として生れ、若くして生花、和歌、雅楽、書道に長け、殊に生花については父青松軒及五大坊鷲嶺について深く研鑽し、将来五大坊職の候補と言われ、又政治面では自由民権を称え、板垣退助に師事したが、明治二十四年二十六歳歿。

一三一、友松軒其鶴　生花伝書　橋爪　村上　肇氏蔵

一三二、青松軒旭水　生花伝書と門人録　橋爪　村上　肇氏蔵

一三三、鷲森軒　松月堂古流伝書　鷲巣　田中達夫氏蔵

名は田中幾三郎、鷲巣の人、松月堂古流華道の師匠で、又楽人も勤めた。

一三四、大橋直広　遺稿　高田　大橋正広氏蔵

高田総氏神、旧郷社田代神社の宮司。明治二十三年十一月五日大橋芳樹の長子として生る。幼より頴敏、独学を以て小学校本科正教員の試験検定に合格す。蓋しこれ当時稀有の事に属す。十五才の時父芳樹帰幽、田代神社の社司を嗣ぎ、高田小学校に奉職す。広く社会の信望をあつめ、氏子の敬慕篤く奉務の神社四十社に及び、県神徳会理事、同養老郡支部長を勤め、昭和二十年奏任官待遇を受け従七位に叙せらる。終戦後、神社制度の変革ありたれど、岐阜県神社庁養老郡支部長として鋭意神道の昂揚に力め、功績顕著、神社本庁総裁表彰の栄を荷う。奏任官待遇祝賀会、勤続五十年祝賀会等、全郡氏子の協賛の下に盛大に行われたるは、その晩年に於て見る精華

とも曰うべきである。氏は性謹直清廉潔白寡慾慈恵、而も学才共に俊秀、和歌諷詠に長じ、嘗て昭和十五年紀元二千六百年に際し、橿原神宮の献詠歌に特選となりたることあり。昭和四十年一月二十八日七十六歳歿。

一三五、日比車運古文書　　小倉　日比一之氏蔵

名は兵助、車運は俳号。小倉の人、俳句を嗜み多くの名句を遺す。且て養老公園に芭蕉の句碑建立の時、その一員に加はった。文久二年歿。

一三六、大倉雅之花ことば　　鷲巣　大倉久氏蔵

名は三郎、鷲巣の人、和歌を好み、若くして上京し、大日本歌道奨励会、敷島会などに所属し歌道に専念し、当時発行の「志きしま」に数多の名作を遺す。明治四十年東京で歿。

印刷
発行　昭和四十六年三月三十一日

養老町文化人遺作集

非売品

発行　養老町教育委員会
　　養老町文化財審議委員会
　　電話(〇五八四三)二―〇七五三番

印刷　槌谷印刷株式会社
　　大垣市南高橋町二ノ五〇
　　電話(〇五八四)八一―三〇六(代)